



Title	西フリジア語の文法構造：動詞（6）
Author(s)	清水， 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要， 108， 23-100
Issue Date	2002-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34032
Type	departmental bulletin paper
File Information	108_PL23-100.pdf



西フリジア語の文法構造 — 動詞 (6) —

清 水 誠

Struktuer fan it Westerlauwersk Frysk

— tiidwurd (6) —

(*The Annual Report on Cultural Science* No. 108). The Faculty of Letters. Hokkaido University. Sapporo. Japan 2002. ISSN 1346-0277)

SHIMIZU Makoto (mshimizu@lit. let. hokudai. ac. jp)

§ 86 分離動詞 (it skiedber tiidwurd)

(1) 語形と意味

英語の句動詞 (エ. phrasal verb, 例. give up, take off) のように, 小辞 (不変化詞, エ. particle) などの「分離成分」(ドイツ語学の用語では「分離前綴り」) を伴う動詞を分離動詞 (またはとくに「不変化詞動詞 (ド. Partikelverb) 」) という。西フリジア語にはオランダ語やドイツ語と同様に, 多数の分離動詞がある。アクセントは分離成分と残りの動詞部分 (以下, 「動詞」) の両方にあるが, 分離成分に卓立 (エ. prominence) があって目立つので, 発音記号では便宜的に分離成分にアクセントを置いて示す (以下, 語例では分離成分と動詞の切れ目を「|」で示す。文例では示さない)。

分離動詞 oer|sette [úə(r)sɛtə] (← [úər] + [sɛtə]) 「翻訳する, (向こう岸へ) 渡す」

←分離成分 oer「向こうへ」(ド. über) + 動詞 sette「置く」(ド. setzen)

oer|sette は「翻訳する」の意味では全体で独自の意味をもつ点で、独立の 1 語の合成動詞（＝複合動詞）と言える。一方、「(向こう岸へ) 渡す」という意味では「分離成分＋動詞」の組み合わせで理解できるので、独立の 1 語の合成動詞とは言いがたい点がある。じじつ、(4)(b)で述べるように、分離動詞は雑多な語を含み、認定に問題がないわけではない。ただし、派生名詞 oersetter には「翻訳者」「渡し守」の二つの意味がある。つまり、oer|sette は「翻訳する」と「(向こう岸へ) 渡す」の意味でともに語形成のインプットとなる点では、それぞれ独立の 1 語の合成動詞とみなすことができる。次の例も同様である。

by|drage「貢献する」(by「そばに」+drage「運ぶ」)→bydrage「貢献」
 mei|wurkje「協力する」(mei「ともに」+wurkje「働く」)→meiwurking
 「協力」

☞ ドイツ語の übersetzen は「(向こう岸へ) 渡す」という意味では分離動詞 (über|setzen) だが、「翻訳する」という意味では非分離動詞 (überˈsetzen) であることに注意 (§ 88 (6))。

(2) 語順

(a) 分離動詞と枠構造

不定形（不定詞・分詞）と従属文定形（現在形・過去形）では、西フリジア語の語順規則に従って、動詞は分離成分の直後に隣接する。枠構造の上では、文末の右枠にある分離成分の直後に動詞を置くことになる。正書法では分離成分と動詞を続け書きする。ただし、「te-第 2 不定詞 (en-不定詞)」では分かち書きする（例、oer te setten）。一方、主文定形（現在形・過去形）と命令形では、同じく西フリジア語の語順規則に従って、動詞だけを文頭から 2 番目の左枠に置き、分離成分は文末の右枠に残る。

ただし、不定詞の中で第 3 不定詞（命令形不定詞）では、定形ではないにもかかわらず、動詞は左枠に置かれ、分離成分の直後に隣接しない。

① 不定形：第 1 不定詞 (e-不定詞)・過去分詞

前域	左枠	[中域]	右枠
Hy	wol	[it gedicht yn it Frysk]	oersette.

「彼はその詩をフリジア語に翻訳したがっている」(不定詞)

Hy *hat* [it gedicht yn it Frysk] *oerset(ten)*.

「彼はその詩をフリジア語に翻訳した」(過去分詞 (現在完了形))

It gedicht *waard* [(troch him) yn it Frysk] *oerset(ten)*.

「その詩は(彼によって)フリジア語に翻訳された」(過去分詞 (受動態過去形))

② 従属文定形 (現在形・過去形)

左枠 [中域]

右枠

Ik tink [dat [er it gedicht yn it Frysk] *oerset*].

「私は彼がその詩をフリジア語に翻訳すると思う」(現在形)

Ik tink [dat [er it gedicht yn it Frysk] *oersette*].

「私は彼がその詩をフリジア語に翻訳したと思う」(過去形)

Ik tink [dat [er it gedicht yn it Frysk] *oerset(ten) hat*].

「同上」(過去分詞 (現在完了形))

Ik tink [dat [er it gedicht yn it Frysk] *oersette wol*].

「私は彼がその詩をフリジア語に翻訳したいのだと思う」(不定詞)

Ik tink [dat [it gedicht (troch him) yn it Frysk] *oerset(ten) waard*].

「私はその詩は(彼によって)フリジア語に翻訳されたのだと思う」(過去分詞 (受動態過去形))

③ 不定形: te-第2 不定詞 (en-不定詞) (分かち書きに注意)

左枠 [中域]

右枠

Hy is fan doel [(om) [it gedicht yn it Frysk] *oer te setten*].

「彼はその詩をフリジア語に翻訳するつもりだ」

④ 主文定形 (現在形・過去形), 命令形

前域 左枠 [中域]

右枠

Hy *set_t* [it gedicht yn it Frysk] *oer* ____₁.

「彼はその詩をフリジア語に翻訳する」(現在形)

Hy *sette_t* [it gedicht yn it Frysk] *oer* ____₁.

「彼はその詩をフリジア語に翻訳した」(過去形)

Set_i [it gedicht yn it Frysk] oer ____₁.

「その詩をフリジア語に翻訳しなさい」(命令形)

⑤ 第3不定詞(命令形不定詞)

左枠 [中域]

右枠

Hy is fan doel [en set [it gedicht yn it Frysk] oer].

「彼はその詩をフリジア語に翻訳するつもりだ」

以上の語順は枠構造による西フリジア語の語順規則に基づく。つまり、動詞は右枠か左枠かに置かれることによって分離成分との位置を変えるのであり、分離成分と分離しているかどうかとは無関係である。「te-第2不定詞(en-不定詞)」を分かち書きすることからわかるように (oer te setten), 分離成分と動詞は隣接することがあるものの、じつはつねに分離していると言える。分離の有無は正書法と語順という統語規則によるのであり、語としての形態的性格とは無関係である。分離動詞は「つねに分離している動詞」であって、「主文定形に限って分離する動詞」ではない。本質は英語の句動詞と同じである。

ただし、第3不定詞(命令形不定詞)の語順は特筆すべき例外であり、枠構造における動詞定形・不定形の語順から逸脱した現象を示す。同様の現象は接続詞 dat (§ 67 (3)) にも見られる。

(b) 枠越え

中域の前置詞句や副詞(句)が後域に枠越えすることがあるのは、分離動詞でも同様である(名詞句主語・目的語・補語は不可)。

前域 左枠 [中域]

右枠 [後域]

Set [de tekst skriftlik] oer [yn it Frysk].

(前置詞句: 可) (ULI'S, B 12: 7 変更)

*Set [skriftlik yn it Frysk] oer [de tekst].

(名詞句目的語: 不可)

「テキストを文字に書いてフリジア語に訳しなさい」

Lês [it ferhaal nochris]

foar [oan jo kursus-
lieder].

(前置詞句：可) (ULI'S, B 13 : 15 変更)

*Lês [nochris oan jo kursuslieder] foar [it ferhaal].

(名詞句目的語：不可)

「その物語をもう一度，講師の先生に向かって朗読しなさい」

次例の名詞 freed は「今度の金曜日に」という意味で副詞的に用いているので，分離動詞を含む te-第2 不定詞 (en-不定詞) 句の右側に枠越えすることができる。

Wat wiest fan doel [om oan te lûken] [freed]? 「あなたは今度の金曜日に何を着ていくつもりだったの」 (Bangma 1993² : 25)

(3) 分離成分の種類と意味

(a) 前置詞と同形の小品を用いる語

前置詞と同形の小品が分離成分になる分離動詞が多数ある。

by|stean 「援助する」 (by 「... のそばに」+stean 「立っている，... の状態である」)

after|bliuwe 「残留する，遅れる」 (after 「... の後ろに」+bliuwe 「とどまる」)

foar|lêze 「朗読する」 (foar 「... の前に」+lêze 「読む」)

yn|gean 「入る，調査する」 (yn 「... の中に」+gean 「行く」)

nei|sjen 「見送る，点検する」 (nei 「... のあとで」+sjen 「見る」)

oan|stekke 「点火する」 (oan 「... の表面・側面に (接して)」+stekke 「刺す，突く」)

oer|jaan/op|jaan 「あきらめる」 (oer 「... の上を，... を越えて」/op 「... の上 (表面・側面) に」+jaan 「与える」)

om|rinne 「歩きまわる」 (om 「... のまわりに」+rinne 「歩く」)

op|ite 「食べ尽くす」 (op 「... の上 (表面・側面) に」+ite 「食べる」)

ta|nimme 「増える」 (ta 「... の方向・状態・関係へ，... に加えて」+nimme 「取る」)

troch|komme 「通り抜ける，やり遂げる」 (troch 「... を通って」+

komme 「来る」)

tsjin|steane 「抵抗する」(tsjin 「... に向かって, ... にたいして」+steane 「立っている, ... の状態である」)

ûnder|dûke 「(水中に) 潜る, 潜伏する」(ûnder 「... の下に」+dûke 「潜る」)

út|noadigje 「招待する」(út 「... の外に, ... から」+noadigje 「招待する, 引きつける」)

Lês rige 1-10 lûdop foar. 「1 行目から 10 行目まで声を出して朗読しなさい」(foar|lêze) (ULPS, A 16:7 変更)

We *jouwe de hoop net oer.* 「私たちは希望を捨てません」(oer|jaan) (ULPS, B 4:15 変更)

Hja *ha it fjoer oanstutsen.* 「彼らは火をつけた」(oan|stekke) (ULPS, C 9:21 変更)

Ik sil besykje ek myn âlde freonen *út te noadigjen.* 「私は旧友たちも招待するつもりです」(út|noadigje)

☞ 歴史的には, 上の前置詞は副詞としてもはたらいだ。

以下の前置詞と同形の小辞(不変化詞)の用法には注意が必要である。

(b) om 「無秩序の動作」

om には特定の方向や目標なしにあてもなく活動するという, 無秩序の動作を表わす用法がある(「そこらじゅう... する, あてもなく... する」)。前置詞句を伴うことが多く, 自動詞である。運動動詞に用いることが多いが, それ以外の動詞の例もあり, 数が多い(Dyk 1991)。

Se *dangelen* oeren yn 'e stêd *om.* 「彼らは何時間も町中をぶらぶらしていた」(om|dangelje ← dangelje 「うろつく」)(ib. 69 変更)

Der *rûn* in mich op 'e tafel *om.* 「ハエがテーブルの上をあちこち歩き回っていた」(om|rinne ← rinne 「歩く」)(ib. 76 変更)

De ûndernimmingsrie *prate* oeren op it útstel *om.* 「労使協議会はその提案について何時間もあれこれ話し合った」(om|prate ← prate 「話す」)(ib. 69)

In dichter *gûchelt* wat mei wurdjes *om*. 「詩人というものは言葉を巧みにいろいろ操るものだ」(om|gûchelje ← gûchelje「手品を使う, 巧みに操作する」)(ib. 69)

☞ オランダ語では分離成分 *om* の使用は今日では少なく, *rond* も運動動詞の一部に限られる。ドイツ語では *herum/umher* が対応するが, 西フリジア語に比べると数が少ない (ib. 91ff.)。

(c) oan/ta 「強意」

方向・到達を示す *oan/ta* は運動動詞・作業動詞 (*arbeidzje* 「働く」, *feije* 「掃く」, *breidzje* 「編む」など)・天候動詞などにつけて, 強意 (*yntensyf*) の表現に多用する(「ちゃんと...する, しっかり...する」)。運動動詞や作業動詞では, *moatte* 「...する必要がある」, *kinne* 「...ることができる」などの話法の助動詞とともに用いる例が目立つ。*oan/ta* を伴った分離動詞は辞書にはかならずしも記載されておらず, かなり自由に用いることができる (Tamminga 1963: 275-277)。

Jonge, do *moatst oanite*, want der *kin tahaaid wurde* fan 'e middei. 「おまえ (=男の子に向かって), ちゃんと食べるんだぞ。今日の昼にはたっぷり干し草作りがあるかもしれないからな」(oan|ite/ta|haaie ← ite 「食べる」/haaie 「干し草を作る」)(ib. 275 正書法変更)

Wy *meie wol wat oantrêdzje*, oars komme wy te let. 「私たちはちょっとしっかり大股で歩かなければならないぞ。そうしないと, 遅れてしまう」(oan|trêdzje ← trêdzje 「大股で歩く」)(ib. 276 正書法変更)

Ien, dy't goed fertsjinnet, *moat ek oanarbeidzje*, tinkt my. 「稼ぎが良い者はちゃんと仕事もしなければならぬと, 私には思える」(oan|arbeidzje ← arbeidzje 「働く」)(ib. 277 正書法変更)

It {*friest/wintert*} *oan* op 't heden. 「このごろは {とても冷える/めっきり冬らしくなってきた}」(oan|frieze/oan|winterje ← frieze「冷える, 霜が降りる」/winterje 「冬めく」)(ib. 276 正書法変更)

It {*reint/tsjustert*} *oan*. 「{だいぶ雨が降っている/すっかり暗くなってきた}」(oan|reine/oan|winterje ← reine 「雨が降る」/tsjusterje 「日

が暮れる」) (ib. 276 正書法変更)

De boeren *kinne* mei dit waar mar *taûngetiidzje*. 「お百姓さんはこのお天気ならちゃんと干し草作りができる」 (ta|ûngetiidzje ← ûngetiidzje 「干し草を作る」) (ib. 277 正書法変更)

It *hat* fannacht {*taferzen/tawaaid*}. 「昨夜は {霜が降りた/風が強かった}」 (ta|frieze ← frieze 「冷える, 霜が降りる」/ta|waaie ← waaie 「風が吹く」) (ib. 276 正書法変更)

☞ オランダ語の aan/toe (← tot) やドイツ語の an/zu にはこのような用法は明確には認めがたく、動詞の数もきわめて少ない。

(d) 副詞と同形の小辞を用いる語

副詞と同形の小辞を分離成分とする分離動詞も少なくない。

achterút|gean/efterút|gean 「後退する, 低下する」 (achterút/efterút 「後ろに」+gean 「行く」)

del|komme 「下る, 立ち寄る」 (del 「下に」+komme 「来る」)

fuort|smite 「投げ捨てる」 (fuort 「離れて」+smite 「投げる」)

gear|fetsje 「要約する」 (gear 「いっしょに, 集まって」+fetsje 「つかむ, とらえる」)

tebek|gean 「後退する, さかのぼる」 (tebek 「後ろへ, 戻って」+gean 「行く」)

thús|bringe 「家に送る」 (thús 「家で」+bringe 「もって来る」)

It tal seehûnen *giet* hieltyd *achterút*. 「アザラシの数はどんどん減っている」 (achterút|gean) (ULI'S, B 9:7)

Ik *kom* jûn om acht oere wol eefkes by dy *del*. 「今晚, 8時に君のところにとちょっと寄るからね」 (del|komme) (Bangma 1993²: 22 変更)

Hy *waard* justerjûn siik *thúsbrocht*. 「彼は昨晚, 病気になって家に運ばれた」 (thús|bringe) (Dykstra 2000: 715 変更)

以下の副詞と同形の小辞の用法には注意が必要である。

(e) werom 「逆転」/wer 「反復」/tebek 「後退」

werom と wer の区別に注意。wer は逆転 (「逆に...する, ...し返す」),

wer は反復(「再び…する」)の意味で用いる。ただし、werom-動詞と wer-動詞が同じ意味を表わすことがある。

そのひとつは、「反復」の意味の wer が「逆転」の意味に転じる場合である。これは「反復」の意味の wer-動詞が完結する単一の動作 (エ. accomplishment) を表わす場合に、動作の反復が方向性を問わずに逆方向の動作にも転用されるためである。次の wer|jaan「返す」がその例である。つまり、「再び与える」(反復)は受け取り手が「第3者に渡す」のではなく、相手に同じ動作を繰り返すという場合には「返す」(逆転)という意味になる (Hoekstra 1993 b : 88 変更)。

werom|jaan 「返す」(werom 「戻って」+jaan 「与える」)

⇔wer|jaan 「複製する, 再現する; 返す」(wer 「再び」+jaan 「与える」)

Hy joech har it jild {werom/wer}. 「彼は彼女にお金を返した」(ib. 88 変更)

werom|krije 「取り戻す」(werom 「戻って」+krije 「得る」)

⇔wer|krije 「再び得る; 取り戻す」(wer 「再び」+krije 「得る」)

Tink mar net datst dat boek {weromkrigest/werkrigest}. 「あの本が戻って来るとは思わないほうがいいよ (=思うな)」(ib. 88 変更)

「逆転」の意味の werom が「反復」の意味になることもある。次の werom|sjen 「再会する」がその例だが、これは「相手が視界の中に戻って来る」という解釈によって生じると考えられる。

werom|sjen 「振り返る; 再び見る, 再会する」(werom 「戻って」+sjen 「見る, 会う」)

⇔wer|sjen 「再び見る, 再会する」(wer 「再び」+sjen 「見る, 会う」)

Dy sil ik hjir net {weromsjen/wersjen}. 「その人に私はここで再会することはないだろう」(Dykstra 2000 : 806 変更, 807 変更)

「逆転」の意味の werom と「後退」の意味の tebek の区別にも注意。werom と tebek は反対方向に動作が及ぶ点で、共通の意味を表わすことがある。とくに時間的にさかのぼる比喩的な意味で認められる (Tamminga 1973 : 1-3)。

werom|sjen「振り返る；再び見る，再会する」（werom「戻って」+sjen「見る，会う」）

⇔tebek|sjen「振り返る」（tebek「後ろへ，戻って」+sjen「見る」）

Hy seach op syn libben {werom/tebek}. 「彼は人生を振り返った」
(Dykstra 2000：708 変更，806 変更)

ただし，werom は前後に向きを変えて戻る動作，tebek は前後に向きを変えないで戻る動作を示す点で，明確に異なる (Tamminga 1973：2 f.)。

De auto ried in eintsje werom. 「車は少しの距離をユーターンして戻って来た」(werom|ride「ユーターンして戻る」)(ib. 2 正書法変更)

De auto ried in eintsje tebek. 「車は少しの距離をバックして戻って来た」(tebek|ride「バックして戻る」)(ib. 2 正書法変更)

☞ ドイツ語では「逆転」の意味の werom は zurück，「反復」の意味の wer は wieder に対応し，西フリジア語とともに分離動詞を形成する。しかし，「返す」という意味には zurück|geben(フ. werom|jaan)を用い，wieder|geben(フ. wer|jaan)は用いない。同様に，「再会する」という意味には wieder|sehen(フ. wer|sjen)を用い，zurück|sehen(フ. werom|sjen)は用いない。つまり，西フリジア語と違って，「反復」と「逆転」の意味的関連は認めがたい。語形的にも，wieder と zurück は西フリジア語の wer と werom と違って関連がなく，zurück はフ. tebek に対応する。

オランダ語では，「逆転」の意味はドイツ語と同様に terug(フ. tebek)で表わすが，「反復」の意味の we(d)er の使用は稀である。この意味では her を用いることが多いが，これは小辞（不変化詞）ではなく，接頭辞であり，非分離動詞を形成する。たとえば，her'zien は「改訂する，修正する」という独自の意味を獲得した非分離動詞である。

英語でも，逆転の意味は小辞（不変化詞）back(フ. tebek)，反復の意味はロマンス語起源の接頭辞 re-で表現する。

このように，西フリジア語は上記の 3 言語に比べて，wer/werom/tebek の用法を意味的に明確に区別する。

(f) fuort「離脱，出発」/ôf「離脱，終結」/wei「離脱，除去」

fuort(オ. voort，ド. fort)，ôf(オ. af，ド. ab)，wei(オ. weg，ド. weg)の使い分けに注意。とくに fuort と wei の相違は微妙である(なお，wei は der ... wei「... から」のように「R代名詞」とともに用いることができる

が、fuort と ôf はできない。ただし、これは分離成分ではない。

fuort|bliuwe 「留守にする」(fuort 「離れて、出発して」+bliuwe 「とどまる」)

Hoe lang *bliuwe* jimme *fuort*? 「どのくらい長い間、君たちは留守にするの」(Bangma 1993²: 22 変更)

ôf|rekkenje 「支払う、清算する」(ôf 「離れて、すまして」+rekkenje 「計算する」)

Moat ik daalk *ôfrekkenje*? 「私は今すぐお勘定をすませる必要がありますか」(ib. 12 変更)

wei|gean 「離れる」(wei 「離れて、いなくなつて」+gean 「行く」)

Gean wei! 「あっちへ行つてよ」(Dykstra 2000: 801)

(g) 形容詞・名詞

小辞(不変化詞)以外に形容詞や名詞を分離成分とする分離動詞がある。抱合動詞 (§ 83~85) との相違に注意 (§ 85 (2), (3)(c))。

① 形容詞+動詞

dwers|lizze 「へそを曲げる」(dwers 「横切った」+lizze 「横になっている」)

goed|karre 「承認する」(goed 「良い」+karre 「検査する」)

skjin|meitsje 「掃除する」(skjin 「清潔な」+meitsje 「する」)

flau|falle 「失神する」(flau 「力のない」+falle 「倒れる」)

It jonkje *leit dwers*. 「男の子はへそを曲げている」(dwers|lizze) (Eisma 1989: 24 変更)

Deputearre Steaten *hawwe ús útstel goedkard*. 「州義会是我々の提案を承認した」(goed|karre) (WTF 7/1990: 308 変更)

Hjoed moatst dyn keamer *skjinmeitsje*. 「今日、おまえは部屋を掃除しなければいけないよ」(skjin|meitsje)

② 名詞+動詞

broek|sette 「奮闘する」(broek 「ズボン」+sette 「据える」)

diel|nimme 「参加する (oan ... に)」(diel 「部分」+nimme 「取る」)

les|jaan 「教える, 教師である」(les 「授業」+jaan 「与える」)
stân|hâlde 「もちこたえる」(stân 「姿勢, 構え」+hâlde 「保つ」)
De boeren *namen* oan de besprekkings *diel*. 「農民たちは話し合いに参加した」(diel|nimme) (WFT 4/1987: 11 変更)
De muorre *hold* stân yn 'e stoarm. 「外壁は嵐の中でもちこたえた」
(stân|hâlde) (Dykstra 2000: 659)

(4) 分離動詞のその他の用法

(a) 「第2 不定詞 (en-不定詞)+komme」と分離動詞

運動の様態を表わす「第2 不定詞 (en-不定詞)+komme」 「... しながら来る」の構文では, 第2 不定詞 (en-不定詞) で現われる運動動詞が分離成分を伴うことが多い (Tiersma 1999²: 116)。

Hja *kaam oanriden*. 「彼女は車でやって来た」(oan|ride 「(車で) 乗りつける」) (ib. 116 変更)

オランダ語でもふつう分離成分を伴う運動動詞を用いるが, 不定詞(おもに北部, つまりオランダ)のほかに, 過去分詞(おもに南部, つまりベルギー)になることがある (ANS 1997²: 964 f.)。ドイツ語では分離成分を伴う必要はなく, 過去分詞を用いる。

オ. Zij *kwam {aanrijden/aangereden}*. 「同上」(aan|rijden)

ド. Sie *kam gefahren*. 「同上」(fahren) (Curme 1977¹¹: 266 変更)

北ゲルマン語では現在分詞を用いることがある。

(b) 分離動詞の認定の問題

分離動詞は雑多なものを含み, 拡大解釈される傾向がある。fuort|smite「投げ捨てる」(fuort 「離れて」+smite 「投げる」, (3)(f)) を例に取ると, 次例では名詞句目的語 dy boel 「あんなもの」が枠越えしており, fuort は右枠にある分離成分とは言えないことになる ((2)(b)参照)。

Smyt fuort dy boel en keapje der wat nijs foar yn 't plak. 「あんなものは投げ捨てて, その代わりに新しいものを買いなさい」(ULI'S, C 11: 5)

また, stân|hâlde「もちこたえる」(stân「姿勢, 構え」+hâlde「保つ」)は, 次例では stân に否定冠詞 gjin がついている。gjin stân は名詞句を形成し,

[[gjin stân]_{NP} hâlde]_{VP} 「もちこたえられない」は動詞句と解釈されるので、stân は分離成分ではあり得ないことになる。つまり、意味的にはひとつのまとまりをなしても、分離動詞という 1 語の動詞と認めることにまったく問題がないわけではない。

Dat argumint *hâldt gjin stân*. 「その論拠は疑わしい (=もちこたえられない)」 (Dykstra 2000 : 659)

⇒ オランダ語では続け書きしても、語形的に対応する西フリジア語では分かち書きする語がある。オランダ語と比較すると、西フリジア語では正書法で分離動詞の種類を制限しようとする傾向が比較的強いと言える。

フ. *televyzje sjen* ⇔ オ. *televisie|kijken* 「テレビを見る」

derút sjen ⇔ *eruit|zien* 「... のように見える」 (ド. *aus|sehen*)

swart ride (Visser 1985 : 914) ⇔ *zwart|rijden* 「無銭乗車する」 (ただし、フ. *swart|ride*, Dykstra 2000 : 692)

swart sjen (Visser 1985 : 914) ⇔ *zwart|kijken* 「受信料を払わずにテレビを見る」 (ただし、フ. *swart|sjen*, Dykstra 2000 : 692)

フ. *Hy sjocht der bliid út*. 「彼はうれしそうに見える」 (*derút sjen*)

オ. *Hij ziet er blij uit*. 「同上」 (*eruit|zien*)

フ. *Hoe sjocht it derút?* 「それはどんなぐあいですか」 (*derút sjen*)

オ. *Hoe ziet het eruit?* 「同上」 (*eruit|zien*)

オランダ語の *binnen* 「中へ」は西フリジア語では分離成分としては用いない。西フリジア語では *deryn* 「その中へ」 (*der* 「その」+*yn* 「中へ」) を用いるが、正書法では分かち書きし、分離成分とはみなさない。

フ. *deryn komme* 「入って来る」/*deryn gean* 「入って行く」

オ. *binnen|komen* 「同上」/*binnen|gaan* 「同上」

⇒ 分離動詞の認定にかんする問題点はドイツ語でも指摘できる。新正書法では、旧正書法で続け書きしていた小辞 (不変化詞) 以外の分離成分を分かち書きをすることで、分離動詞の種類を制限しようとしているが、新たな混乱も招いている。なお、ドイツ語に分離動詞というカテゴリー自体を設定することを疑問視する意見が亀井/河野/千野 (1996 : 1201 ff.) に見られる。

§ 87 非分離動詞 (*it ûnskiedber tiidwurd*) (1) : *be-* による接頭辞動詞

(1) 接頭辞の種類

非分離動詞としては、すでに述べた抱合動詞 (§ 83~85) のほかに、「接頭辞動詞」 (ド. *Präfixverb*) がある。接頭辞動詞は接頭辞 (*it foarheaksel*)

による非分離動詞であり、次の2種類に分かれる。アクセントは原則として接頭辞ではなく、後続の動詞部分にある。

- A. be- [bə], fer- [fə(r)], ûnt- [unt], te- [tə], mis- [mɪs], wjer- [vjɛr]
 B. 前置詞と同形の接頭辞: efter-, foar-, oan-, oer-, om-, troch-, ûnder-

Aグループの be- と fer- は生産的だが、残りの接頭辞とBグループの接頭辞はすべて非生産的である。とくにBグループによる非分離の接頭辞動詞は、ほとんどオランダ語からの借用による(6)。

歴史的には、Aグループの最初の3接頭辞は、Bグループと同様に、無アクセントの位置で弱化したかつての前置詞と関係がある。be- と fer- には対応する前置詞が今日でも残っている。fer- は今日では失われたものも含めて、複数の前置詞の混合によって生じた。

フ. be-~by, fer-~foar など(3種類の前置詞の混合)

オ. be-~bij, ver-~voor など(同上)

ド. be-~bei, ver-~vor/für など(同上)

上記の前置詞は分離動詞の分離成分としても用いる。

ûnt- (ド. ent-/emp-, オ. ont-) は接頭辞 ant- (ド./オ. ant-) と歴史的に関係があるが、ant- は前置詞としては残っておらず、分離動詞の分離成分としても用いない(ド./オ. ant- も同様)。ちなみに、ゴート語の and, 古ザクセン語の ant は前置詞として用いる。

オランダ語とドイツ語との語形的な対応は次のようになる。

フ. be-/fer-/ûnt-/te-; mis-/wjer-

オ. be-/ver-/ont-/なし; mis-/weer-

ド. be-/ver-/ent-~emp-/zer-; miss-(旧 miß-)/wider-

西フリジア語にはオランダ語やドイツ語に語形的に対応する次の接頭辞がない。

フ. なし

オ. ge-/her-~er- (ドイツ語からの借用)

ド. ge-/er-

次にいくつか例を示す。

フ. brûke 「使う」/lykje 「似ている」/leauwe 「信じる, 思う」

オ. gebruiken 「同上」/gelijken 「同上」/geloven 「同上」

ド. gebrauchen 「同上」/gleichen 「同上」/glauben 「同上」

西フリジア語の werom/wer を伴う分離動詞がオランダ語の her-/er-やドイツ語の er- に対応することがある。

フ. werom|kenne/wer|kenne 「識別する, 認識する」(分離動詞)

オ. herkennen 「同上」(非分離動詞)

ド. (wieder|)erkennen 「同上」(erkennen は非分離動詞)

西フリジア語の be- がオランダ語やドイツ語の ge- に対応することがある (2) 参照)。

フ. bewenne 「慣れる」/befalle 「(...) に 気に入る」/behear(r)e 「(...) に 属する」

オ. gewennen 「同上」/bevallen 「同上」/behoren 「同上」

ド. sich gewöhnen 「同上」/gefallen 「同上」/gehören 「同上」

西フリジア語には, オ. herinneren/ド. erinnern 「思い出させる」に語形的に対応する語は, 非分離動詞・分離動詞ともに存在せず, 他の表現で代用する。

フ. It stiet me noch by. または It mei my noch tinke. 「私はまだそのことを覚えている」(Visser 1985 : 279)

It heucht my noch. または It mei my heuge. 「同上」(Zantema 1984 : 391)

Ik wit it noch. 「同上」

オ. Ik *herinner* het *me* nog. 「同上」

ド. Ich *erinnere mich* noch daran. 「同上」

フ. It is my troch it sin gongen. または It is my trochgongen. 「私はそのことをもう思い出せない」(Visser 1985 : 279)

It heucht my net. または It mei my net heuge. 「同上」(Dykstra 2000 : 240)

Ik wit it net mear. 「同上」

オ. Ik kan het *me* niet meer *herinneren*. 「同上」

ド. Ich kann *mich* daran nicht mehr *erinnern*. 「同上」

西フリジア語で接頭辞 ge- のついた動詞は, オランダ語からの借用である (Sipma 1949 : 68)。

フ. gebiede 「命令する」/geniet(sj)e 「楽しむ, 享受する」/genêze 「(病気か) 治る」

オ. gebieden 「同上」/genieten 「同上」/genezen 「同上」

ド. gebieten 「同上」/genieBen 「同上」/genesen 「同上」

(2) 接頭辞 be-

Aグループの接頭辞でとりわけ多様な用法があるのは be- である。be- は生産的な接頭辞であり、西フリジア語ではドイツ語やオランダ語に比べてより広い範囲で用いる (Dijkstra 1900-11: 106, Sytstra/Hof 1925: 127-129, Tamminga 1963: 201-205, Hoekstra 1998: 144-147)。be- のついた動詞(以下, 「be-動詞」)の数は西フリジア語ではかなり多く, オランダ語とドイツ語に比較しても多いと言える。

be-動詞は be- のない動詞と語形的・意味的な対応を欠いて, 語彙的に固定しているものと, be- のない動詞と何らかの規則的な意味的関連が認められるものに大別される。後者にかんして, be- の基本的な意味は「対象への直接的影響と動作の達成」とほぼ総括でき, 具体的な現われかたにはさまざまな場合が含まれる。be- の用法はオランダ語とドイツ語に比べて, はるかに多岐にわたっている。

☞ be- は語源的に前置詞および分離動詞の分離成分の by (オ. bij, ド. bei) に相当する。ただし, 古くは「... のまわりに」の意味であり, om(オ. om, ド. um) と関係があった (ラテン語 ambi と同じ語源であり, am- の部分が om, -bi の部分が by に相当する)。

(a) be- のない動詞と語形的・意味的な対応を欠くもの

① be- のない動詞と語形的な対応を欠くもの

bedigenje「整える」(*digenje は存在しない。以下同様), bedjerre「甘やかす, 腐る」, befelje/befelle「命令する」, begjinne「始める, 始まる」, beledigje「侮辱する」, belide「自白する, (信仰を) 告白する」, bepale「規定する」, jin besauwe「仰天する」, beseffe「実感する, 意識する」, beslisse「決定する」, bestede/besteegje「費やす」, jin bestuere「騒ぎたてる」, bestuiverje「支払う」, beswike「屈する」

② be- のない動詞と意味的な対応を欠くもの

語形的に対応する be- のない動詞はあるが, 意味的に規則的に関連づけることが困難なものがある。次の語は, be- の基本的意味である「対

象への直接的影響と動作の達成」を部分的に表現しているとも解釈できるように思われるものを含んでいるが、やはり別の語彙的意味ととらえたほうが適当である。

begripe 「理解する, 手元に引き寄せる」 (gripe 「つかまえる」)

begroetsje 「歓迎する」 (groetsje 「あいさつする」)

beheine 「制限する」 (heine 「捕らえる」)

belibje 「経験する」 (libje 「生きる」)

belove/beloovje 「約束する」 (love/loovje 「ほめる」)

besykje 「訪問する, 試みる」 (sykje 「探す」)

besitte 「所有する」 (sitte 「すわっている」)

beslute 「決心する, 含む」 (slute 「閉じる」)

besprekke 「議論する, 論評する」 (sprekke 「発言する」)

bestudearje 「研究する, 探求する」 (studearje 「大学で学ぶ, 大学生である」)

bestean 「存在・存続する」 (steane 「立っている, (... の状態) である」)

bestelle 「注文する, 予約する」 (stelle 「立てる, 据える」)

bestimme 「定める」 (stimme 「投票する, 調整・調律する」)

betsjutte 「意味する」 (tsjutte 「暗示する, 説明する」)

betelje 「支払う」 (telje 「数える」)

bewize 「証明する」 (wize 「示す」)

以下の用法は, be- のない動詞と何らかの意味的関連が認められるものであり, 次の(b)から(k)の種類に分類できる。

(b) 他動詞化

be- は自動詞の前置詞句目的語を名詞句直接目的語に変えて, 他動詞を形成する。つまり, 目標や原因などを表わす前置詞を伴わずに, 動作の影響が直接的に対象に及ぶことを表現する。

beäntwurdzje/beänderje 「(...) に答える」 (antwurdzje/anderje 「答える (op ... に)」)

bedoele 「(...) をねらう, 意図する」 (doele 「ねらう, 意図する (op ...

を)」)

beharkje 「(…を) 聞く」 (harkje 「聞く (nei …を)」)

bejubelje 「(…に) 歓声を上げる」 (jubelje 「歓声を上げる (om …に)」)

bekleie 「(…を) 嘆く」 (kleie 「嘆く (oer …を)」)

beskrieme 「(…を) 嘆き悲しむ」 (skrieme 「嘆き悲しむ (om …を)」)

betreur(j)e 「(…を) 悲しむ」 (treur(j)e 「悲しむ (om …を)」)

betwifelje 「(…を) 疑う」 (twifelje 「疑う (op …を)」)

- i) *Harkje nei de tekst op 'e bân.* 「本文をテープで聞きなさい」 (nei ... harkje) (ULI'S, B 9 : 7 変更)

Beharkje de tekst op 'e bân. 「同上」 (beharkje) (ULI'S, B 3 : 11 変更)

- ii) *Dêr hoechst dochs net om te skriemen?* 「そのことは君は嘆く必要はないじゃないか」 (om ... skrieme) (Dykstra 2000 : 623)

Letter silst dyn ûnfoech dwaan beskrieme. 「後になって、君は自分の不適切な行動を嘆くだろう」 (beskrieme) (Tamminga 1963 : 204 正書法変更)

- iii) *Wêr doelde er op mei dat sizzen?* 「彼はあんなことを言って、何のつもりだったんだろう」 (op ... doele) (Zantema 1984 : 185)

Wat soe hja bedoele? 「彼女はとうとうつもりなのだろう」 (bedoele) (ib. 59 変更)

この be- は動詞の明示的な意味を変更するものではないが、be-動詞には be- のない動詞に比べて、動作の達成や目的語への影響を強調するニュアンスが認められる (「しっかり・十分に ... する」など)。

Hy skeat op 'e liuw. 「彼はライオンをねらって撃った」 (自動詞 sjitte 「ねらって撃つ (op ... を)」) (Hoekstra 1998 : 144 変更)

Hy beskeat de liuw. 「彼はライオンにかなりの銃撃を加えた」 (他動詞 besjitte 「(…を) かなり銃撃する」) (ib. 変更)

動詞と意味的な結びつきが弱い前置詞句を他動詞化する be-動詞もある。

bedrinke 「(…を祝って) 乾杯する」 (drinke 「乾杯する (op ... を祝つ

て)」)

(c) 代換表現 (エ. hypallage)

他動詞の目的語が be- の付加によって以下のような交替を起こすことがあり、これを「代換表現」と呼ぶ。

be- のない動詞：「名詞句 1 + [場所の前置詞 + 名詞句 2] + 動詞」

⇔ be-動詞：「名詞句 2 + [mei + 名詞句 1] + be-動詞」

[場所の前置詞 + 名詞句 2] の前置詞は動詞によって異なるが、be-動詞による代換表現では、[mei + 名詞句 1] のように手段を表わす mei (オ. met, ド. mit) に限られる。[mei + 名詞句 1] は表現しないこともある。

- i) Mem *smart* bûter op it stikje bôle. 「母はパンにバターをぬる」
(smarre「(...) をぬる (op ... の上に)」) (Veenstra 1988 : 149 変更)
Mem *besmart* it stikje bôle *mei* bûter. 「同上」(besmarre「(...) にぬる (mei ... を)」) (ib. 149 変更)

- ii) Heit *sproeide* wetter oer de tún. 「父は庭に水をまいた」(sproeie「(...) をまく (oer ... の上に)」) (ib. 149 変更)
Heit *besproeide* de tún *mei* wetter. 「同上」(besproeie「(...) にまく (mei ... を)」) (ib. 149 変更)

- iii) It jonkje *hat* it tou om de redens *bûn*. 「男の子はスケートにひもを結びつけた」(bine「(...) を結ぶ (om ... のまわりに)」) (ib. 149 変更)
It jonkje *hat* de redens *mei* tou *bebûn*. 「同上」(bebine「(...) に結ぶ (mei ... を)」) (ib. 149 変更)

be-動詞による代換表現は、動作の影響が目的語全体に及ぶことを含意する傾向がある。ただし、義務的に含意する必要はない (Veenstra 1988 : 152)。

De sjauffeur *lade* koffers op de auto. 「運転手は車にトランクを積んだ」(lade「(...) を積む (op ... の上に)」) (ib. 152 変更)

De sjauffeur *belade* de auto *mei* koffers. 「運転手はトランクを積んで車を一杯にした」(belade「(...) に積む (mei ... を)」) (ib. 152 変更)

① 受動化

be- のない動詞による「名詞句 1」と、be-動詞による代換表現の「名

詞句 2」はともに直接目的語であり、受動態で主語になる。

- i) De boer *plante* de tulpen yn de tún. 「農夫は庭にチューリップを植えた」(plantsje 「(...) を 植える (yn ... の中に)」(ib. 152 変更)
De tulpen *waarden* troch de boer yn de tún *plante*. 「チューリップは農夫によって庭に植えられた」(ib. 152 変更)
- ii) De boer *beplante* de tún *mei* de tulpen. 「同上」(beplantsje 「(...) に 植える (mei ... を)」)(ib. 152 変更)
De tún *waard* troch de boer *mei* de tulpen *beplante*. 「同上」(ib.152 変更)

② 被動目的語と達成目的語

be- のない動詞は動作の結果として生じる直接目的語、すなわち「達成目的語」(エ. effectum object)を伴うことがある。しかし、対応する be-動詞は、目的語が動作による直接的影響を受けることを表わすので、達成目的語を伴うことはない。be-動詞の目的語は、動作に先立って存在している「被動目的語」(エ. affectum object)である点で区別される (Veenstra 1988 : 158 f.)。

- i) Heit *skildere* in glês. 「父はガラスの絵をかいた」(skilderje 「(...) の 絵を描く」)
Heit *beskildere* in glês. 「父はガラスに絵をかいた」(beskilderje 「(...) に 絵を描く」)
- ii) Muoike *naait* in jurkje. 「伯母はドレスを編んでいる」(naaie 「(...) を 編んで作り出す」)(ib. 158 変更)
Muoike *benaait* in jurkje. 「伯母はドレスに編み物を施す (=ドレスに何かを編みつける)」(benaaije 「(...) に 編みつけをする」)(ib. 158 変更)
- iii) Omke *hat* in nij hok *timmere*. 「伯父は新しい納屋を作った」(timmerje 「(...) を 木材で作る」)(ib. 158 変更)
Omke *hat* in nij hok *betimmerere*. 「伯父は新しい納屋に手を入れた」(betimmerje 「(...) に 木材で工作を施す」)(ib. 158 変更)

③ 名詞を含む be-動詞 (装備動詞)

be-動詞が語幹に名詞を取り込んでいる他動詞のなかには、「...にく名詞を> 備える」という意味の「装備動詞 (仮称)」(ornativen) がある。この場合、<名詞を> の部分は代換表現の「mei+前置詞」に相当するので、「mei+前置詞」を加える必要はない。たとえば, betegelje「(...) にタイルを張る」は名詞 tegel「タイル」を含んでいるので、「タイルを」の部分に 'mei tegels' として付け加える必要はない。

Ik haw de flier *betegele*.「私は床にタイルを張った」(betegelje「(...) にタイル (tegel) を張る」)

Ik *bedongje* dat lân fan 't jier net.「私は今年はその土地に肥料はやらない」(bedongje「(...) に 肥料 (dong) を与える」)(Tamminga 1963 : 203 変更)

Dizze âlde stoel kin noch wol ris *beklaaid* wurde.「この古いいすは一度、ちょっとクロスを張ってもいい (受動態)」(beklaaie「(...) にクロス・布 (klaaid) を張る」)(ib. 204 変更)

De direksje *bekompjûtert* it hiele ynstitút.「管理部は研究所全体をコンピューター化する (= 研究所全体にコンピューターを備えつける)」(bekompjûterje「(...) に コンピューター (kompjûter) を備えつける」)(Veenstra 1988 : 168)

(d) 「中へ入れこむ」という意味の他動詞

be-動詞は be- のない動詞が表わす動作の結果、目的語を何かの中へ (「yn など+名詞句」) 完全に入れこむという意味をもつことがある。

Jo moatte noch aaïen yn it besleek *beklopje*.「あなたはそれからまだ卵をねり粉に泡立てて混ぜなければなりません」(beklopje「たたくことによって泡立てて混ぜる (yn ... の中へ)」⇔klopje「たたく」)(Hoekstra 1998 : 146 変更)

Hja *hat* blommen yn 't hier *befrissele*.「彼女は花を髪に編みこんだ」(befrissele「編みこむ (yn ... の中へ)」⇔frissele「編む」)(ib. 63 変更)

De sûker *is* deryn *bebakt*.「砂糖がその中に入れて焼いています」

(bebakke 「混ぜて焼く (yn ... の中へ)」 ⇔ bakke 「焼く」) (Dykstra 2000 : 27)

Wy wolle net yn dizze rûzje *behelle wurde*. 「私たちはこの喧嘩に巻き込まれたくありません」 (behelje 「呼び込む (yn ... へ)」 ⇔ helje 「呼んでくる」) (Zantema 1984 : 66 変更)

(e) 効果・充足, 到達・遂行

be- は be- のない他動詞に比べて, 動作の達成による何らかの効果や, 動作の及ぶ対象への到達を表わす他動詞を形成することがある。

① 効果・充足

この意味では, be-動詞は be- のない動詞と明示的意味がはっきり異なるわけではないが, 動作の達成による充足を強調するニュアンスが認められる。

i) De timmerman *skaafde* de rûge planke. 「大工はごつごつした板にかんなをかけた」 (skave 「かんなをかける」) (Veenstra 1988 : 159 変更)
De timmerman *beskaafde* de rûge planke. 「大工はごつごつした板にかんなをかけて平らにした」 (beskave 「かんなをかけて平らにする」) (ib. 160 変更)

ii) Beppe *meant* it gers. 「祖母は草を刈う」 (meane 「刈る」) (ib. 159 変更)
Beppe *bemeant* it gers. 「祖母は草を刈ってきれいにする」 (bemeane 「刈ってきれいにする」) (ib. 160 変更)

iii) Pake *hat* it izer *bûcht*. 「祖父は鉄を曲げた・のばした」 (bûge 「曲げる, のばす」) (ib. 159 変更)
Pake *hat* it izer *bebûcht*. 「祖父は鉄を曲げて・のばして整えた (= 目的にかなうようにした)」 (bebûge 「曲げて・のばして整える」) (ib. 160 変更)

次の例は一種の強調表現とも言える。

iv) Ik *tankje* jo hertlik foar jo brief. 「お手紙に心から感謝します」
(tankje 「感謝する, 謝絶する, ... のおかげである」)
Ik *betankje* jo hertlik foar jo brief. 「お手紙に心から深謝します」

(betankje 「深謝する, 丁重に謝絶する」)

② 到達・遂行

この意味の be-動詞は, be- のない他動詞に比べて, 動作が十分に遂行され, 目的語に到達することを明示する。話法の助動詞 kinne「... できる」を伴ったり, 可能の受動の意味(「... され得る」)を表わす「te-第2 不定詞(en-不定詞)+wêze」構文などで使い, 否定詞や程度の副詞を伴うことが多い。つまり, 話法的ニュアンスを伴う表現で用いる傾向があると言える。

De hûn koe de hazze lang net berinne. 「犬はウサギに到底, 追いつけなかった」(berinne 「(... に) 走って追いつく」⇔rinne 「走る」)(Tamminga 1963 : 203 変更)

De swimmer kin it hjir net bedjipje. 「泳ぎ手はここでは深くて足が届かない」(bedjipje 「(... の) 底に足が届く, (... の) 深さを測る」⇔djipje 「(... の) 深さを測る」, djip 「深い」)(Dykstra 2000 : 27 変更)

Yn in pear tellen wie it fleantúch net mear te beëagjen. 「いくつか数を数えている間に, 飛行機はもう目で後を追うことができなくなった」(beëagje 「目で追う」⇔eagje 「見る」, each 「目」)(Tamminga 1963 : 203 変更)

Soe dit paad te befytse wêze? 「この道は自転車で行けるのだろうか」(befytse 「(... を) 自転車で走破する」⇔fytse 「自転車で行く」)(他動詞化)(ib. 202 変更)

Fan 'e boat koene wy de wâl sawat krekt bestappe. 「ボートから私たちは埠頭になんとかやっと足が届いた」(bestappe 「(... に) 乗り移る」⇔stappe 「乗る」)(ib. 203 変更)

次例の besjitte は自動詞の「他動詞化」(b), besmite は「代換表現」(c)とも類似している。

Dy fûgel is te fier fuort, ik kin him net besjitte. 「あの鳥は遠くに離れすぎている。私はそれを撃って命中させることができない」(besjitte

「(...) を撃って命中させる」⇔sjitte「(...) を撃つ, 仕留める (他動詞)」(WFT 2/1986: 137 正書法変更)

De guozzen wiene sa tichtby, dat hy *koe* se *hast* mei in stien *besmite*.
「ガチョウたちはすぐそばにいたので、彼はほとんど石を投げてぶつけることができそうだった」(besmite「(...) に投げて当てる (mei ... を)」⇔smite「(...) を投げる」)(Tamminga 1963: 203 変更)

☞ オランダ語とドイツ語では、「効果・充足」と「到達・遂行」の意味は be- の用法として部分的あるいは少数の慣用句で認められるにすぎない。

フ. betankje 「深謝する」

オ. bedanken 「同上」

ド. sich bedanken 「同上」

フ. besmite 「(...) を撃って命中させる」

ド. beschmeißen/bewerfen 「同上」

フ. Der is gjin lân mei him te *besilen*. 「彼はまったく手に負えない (=彼とともに航海してたどり着ける国はない。慣用句)」(besile「(...) に航海してたどり着く」)

オ. Er is geen land met hem te *bezeilen*. 「同上」(bezeilen「同上」)

(f) 収益・獲得

be- は動詞の本来の目的語以外に、動作の達成によって間接的にもたらされる収益や獲得物を新たに目的語として、他動詞を形成することがある。

Us pake *hat* genôch jild *bebuorke* dat er stil libje kin. 「伯父は余生を静かに過ごすのに十分な金を農業を営んでたくわえた」(bebuorkje「農業を営んで (...) を得る」⇔buorkje「農業を営む」)(Tamminga 1963: 203 変更)

Pyt *hat* mei syn wiif in grut boerepleats *betroud*. 「ピトは奥さんと結婚して大きな農場を手に入れた」(betrouwe「結婚して (...) を) 手に入る (mei ... と)」⇔trouwe「結婚する (mei ... と)」(ib. 203 変更)

Hy *befiske* op 'e Noardsee in sober stikje brea. 「彼は北海で漁をしてわずかなパンを得ていた」(befiskje「漁をして (...) を) かせぐ」⇔fiskje「漁をする」)(ib. 203 変更)

Se *hawwe* de frede *befochte*. 「彼らは戦いによって平和を勝ち取った」

(befjochtsje 「戦って (... を) 得る」 ⇔ fjochtsje 「戦う」)

Sûnder in kloek wyfke *hie* Jan dat kaptaaltsje noait *bewrotte* kinnen.
 「利口な奥さんなしには、ヨンはいくら懸命に働いてもあの財産はけっして手に入らなかっただろう」 (bewrotte 「懸命に働いて (... を) 得る」
 ⇔ wrotte 「懸命に働く」) (ib. 203 変更)

☞ この be- の用法はオランダ語とドイツ語では稀にしか認められない。ドイツ語ではふつう接頭辞 er- を用いる。西フリジア語には er- に相当する接頭辞がないので、be- がその役割を果たしているとも考えられる。

フ. de {frijdom/frijheid} befjochtsje 「戦いによって自由を勝ち取る」

オ. de vrijheid bevechten 「同上」

ド. die Freiheit {erkämpfen/erringen} 「同上」

(g) 不足・不快感の発生

be-動詞は、動作の達成によって動作主である主語に発生する身体的不足や不快感を新たに目的語として、他動詞を形成することがある。

We *hawwe* honger *beskrept*. 「私たちは重労働をしておなかがすいた」
 (beskreppe 「あくせく働いて (... という状態に) なる」 ⇔ skreppe 「あくせく働く」) (Hoekstra 1998 : 145 変更)

Hy *hat* pine yn 'e holle *bereizge*. 「彼は旅行をしてから頭痛がした」
 (bereizgje 「旅行した後で (... という状態に) なる」 ⇔ reizgje 「旅行する」) (ib. 145 変更)

Drink mar ris op, jim sille wol toarst *berûn hawwe*. 「さあ、飲み干しなさいよ。おまへたちは走って喉が渴いただろうから」 (befytse 「自転車に乗って (... という状態に) なる」 ⇔ fytse 「自転車で行く」) (WFT 2/1986 : 103)

☞ この be- の用法はオランダ語とドイツ語には見られない。

(h) 自動詞 (能格動詞) の be-動詞

be- が他動詞ではなく、自動詞を形成することがある。この be-動詞は、主語が動作によって変化を被り、他動詞の目的語に相当する能格動詞 (エ. ergative verb, または非対格動詞, エ. unaccusative verb) の自動詞であり、完了の助動詞は wêze である。つまり、動作の達成による変化で何らかの結果

を生じる対象が be-動詞の主語として現われている。

① be- のない動詞が他動詞の場合

be-動詞は性質や自然現象などを表わす。

De beage *bebrûkt* al gau wat. 「馬の引き具は使っているうちにすぐに少しなじんでくるものだ」(bebrûke 「(... が) 使ってなじむようになる」⇔brûke 「(... を) 使う」)(Veenstra 1988 : 161)

It brea *is bebakt*. 「ライ麦パンは焼くと縮んだ」(bebakke 「(パンなどが) 焼くと縮む」⇔bakke 「(パンなどを) 焼く」)(Zantema 1984 : 57)

Spinaazje *besiedt* oe sa. 「ホウレン草は煮るとすごく縮む」(besiede 「(... が) 煮ると縮む」⇔siede 「(... を) 煮る」)(ib. 146)

De glêzen *beblomje* fan 'e froast. 「窓ガラスは凍って霜の花が咲く」(beblomje 「(... が) 花模様をつける」⇔blomje 「(... を) 花模様で飾る」)(Tamminga 1963 : 203 正書法変更)

次の語は具体的な動作が比喩的な意味に転じた例である。

De gearkomste *is goed* { *beslein/beteart* } . 「会議は成功した」(beslaan/beteare 「(... が良い) 結果になる」⇔slaan 「(... を) 打つ」/teare 「たたむ, 包む」)

副詞 '(earst/noch) wat' 「(まず/まだ) 少し」と話法の助動詞 *moatte* 「... する必要がある」が共起することも多く、この be- は話法的ニュアンスを伴うと言える。wat は不定代名詞 wat 「何か」と同形だが(オ. wat, ド. etwas), この場合はむしろ副詞としてはたらいっている。

Sa'n nij stik ark *moat earst wat bebrûke*. 「そういう新しい道具はまず、ちょっと使い慣れる必要がある」(bebrûke 「(... が) 使ってなじむようになる」⇔brûke 「(... を) 使う」)(Zantema 1984 : 57)

Nije klean *moatte earst wat bedrage*. 「新しい服はまず、少し着てみてなじませる必要がある」(bedrage 「(... が) 着用してなじむようになる」⇔drage 「(... を) 着用する」)(Sytstra/Hof 1925 : 128 正書法変更)

Dizze tsiis *moat noch wat belegerje*. 「このチーズはまだ少しねかせる必要がある」(belegerje「(...)が³貯蔵して熟成する」⇔legerje「(...)を貯蔵する」)(Hoekstra 1998:146 変更)

Dy nijmelke ko *moat earst wat bemelke*. 「あの子牛を生んだばかりの乳牛は、まずちょっと、乳がよく出るように乳しぼりをしてやる必要がある」(bemelke「(...)が乳搾りをして乳がよく出ようになる」⇔melke「(...)の乳をしぼる」)(Zantema 1984:75)

② be- のない動詞が能格動詞の自動詞の場合

be- を伴わない動詞自体が能格動詞の自動詞の場合もある。be- の付加によって動作の達成とその変化の結果を強調するニュアンスがあり(「しっかり・十分に・よく...になる, ...しつくす」), 一種の強調表現とも言える。

Mei ien waarm reintsje sil it lân wol gau *begroeie*. 「一度、暖かい雨でも降れば、その土地はたぶんすぐに草が一面に茂るようになるだろう」(begroeie「一面に茂る, 十分に成長する」⇔groeie「茂る, 成長する」)(WFT 1/1984:323 正書法変更)

{Sneinswurk/Dy beam} *bedijt net*. 「{日曜仕事は大成しない/あの木はちゃんと茂らない}」(bedije「よく繁栄・繁茂する」⇔dije「繁栄・繁茂する」)(Zantema 1984:58)

It semint *wie bestjurre*. 「セメントはよく固まっていた」(bestjurje「しっかり固まる」⇔stjurje「固まる」)(Dykstra 2000:50)

Yn it rêstige wetter fan it Waad *besinkt* in protte ôfeart út dat Rynwetter. 「ヴァート地帯(=北海沿岸の干潟地帯)の静かな水の中には、ライン川からのたくさんの廃棄物が沈殿する」(besinke「沈殿する」⇔sinke「沈む」)(ULI'S, B 9:7)

この用法では副詞 *wat* 「少し」が共起することがあり、動作の達成によって強められた変化の意味を主観的に規定している。つまり、be- はやはり話法的ニュアンスを伴うと言える。

Dat doek sil *wol wat bekrimpe* by it waskjen. 「あの布はたぶん洗う

と少し縮むだろう」(bekrimpe「ずっと縮む」⇔krimpe「縮む」)
(Zantema 1984 : 71 変更)

Wy fiele ús hjir noch net sa thús, mar it sil wol *wat bewenne*.「私たちはここではまだそれほど落ち着きませんが、たぶんいくぶん慣れてくると思います」(bewenne「よく慣れる」⇔wenne「慣れる」)
(Hoekstra 1998 : 146 変更)

次は比喩的な意味を表わす例である。

Dy leafde is aardich *besakke*.「あのロマンスはだいふ熱がさめた」
(besakje「落ち着く、下がる」⇔sakje「下がる」)(ib. 82)

③ be- のない動詞が非人称動詞の場合

Pas op, de boeken *bereine*.「気をつけて、本が雨で濡れるよ」(bereine「雨で濡れる」⇔reine「雨が降る(非人称動詞 it reint)」)(Zantema 1984 : 79)

Ik *bin bereind*.「私は雨に降られた(=雨で濡れた)」(同上)

Dong *moat wat bereine*.「肥料は少し雨に当てて湿らせる必要がある」
(同上)(WFT 2/1986 : 94 正書法変更)

Har fingers *wiene beferzen*.「彼女の指はしもやけになった」(befrieze「凍傷・しもやけになる、凍る」⇔frieze「氷が張る(非人称動詞 it friest)」)(Dykstra 2000 : 31 変更)

It lân *besnijt*.「その土地は雪が積もる」(besnije「雪で覆われる」⇔snije「雪が降る(非人称動詞 it snijt)」)(Veenstra 1988 : 161)

Sokke nije ferkearsrêgels *moatte earst wat besimmerje en bewinterje*.「そういう新しい交通規則はまず、ある程度、夏冬を越してなじませなければならぬ」(besimmerje「夏を越してなじむようになる」/bewinterje「冬を越してなじむようになる」⇔simmerje「夏になる(非人称動詞 it simmert)」/winterje「冬になる(非人称動詞 it wintert)」)
(Tamminga 1963 : 205 正書法変更)

☞ この be- の用法はオランダ語では稀にしか見られない。ドイツ語の be- にこの用法はほとんど存在しない。

フ. besinke 「沈殿する」 (sinke 「沈む」)

befrieze 「凍傷・しもやけになる, 凍る」 (frieze 「氷が張る (非人称動詞 it friest)」)

オ. bezinken 「同上」 (zinken 「同上」)

bevriezen 「同上」 (vriezen 「同上 (同上 het vriest)」)

ドイツ語で西フリジア語の befrieze に対応するのは, 接頭辞 er- を伴った erfrieren である。ただし, frieren は非人称動詞以外にも用いる。また, オランダ語では ge- が対応することがある。

フ. bewenne 「慣れる」 (wenne 「同左」)

オ. gewennen 「同上」 (wennen 「同上」)

ドイツ語では gewöhnen は他動詞であり, *wöhnen という語はない。

西フリジア語の bereine に対応するオランダ語の beregenen とドイツ語の beregnen は, ともに「(…に) 散水する, 雨に当てて濡らす」という他動詞である。西フリジア語の bereine はこの意味の他動詞としても用いるが, 同時に「雨で濡れる」という意味の能格動詞の自動詞として用いる点で異なる。

☞ be-動詞が能格動詞の自動詞である代表的な例に, begjinne がある。begjinne は「(…を) 始める」という意味の他動詞でも用い, 自動詞でも「(…が) 始まる」「始める (mei…を)」という意味で用いる。これはオランダ語とドイツ語の beginnen でも同様である。ただし, 西フリジア語の begjinne とオランダ語の beginnen では, ともに完了の助動詞はすべての用法でつねにそれぞれ wêze/zijn 支配である。一方, ドイツ語の beginnen はつねに haben 支配である。なお, 3 言語ともに be- を欠く語形は現代語には残っていない。

④ 過去分詞で使う自動詞 (能格動詞) の be-動詞

年中行事や社会的な慣習としての動作を経た結果, 主語の状態の変化を示す表現について, 能格動詞の自動詞としての be-動詞を過去分詞で使う用法がある。様態を示す形容詞を伴うことが多い。

Hoe is 't, binne jo goed bereizge? 「どうです, 旅行は良かったですか」 (bereizgje 「(…を) 旅行する」の過去分詞) (Tamminga 1963 :

204 正書法変更)

Ik fiel my mar *min bebrullofte*. 「私は良い結婚生活を送っていないような気がする」(bebrulloftsje「結婚式を挙げる, 結婚生活に入る」の過去分詞)(ib. 204 変更)

Hja liket *aardich bewive te wêzen*. 「彼女はちゃんと嫁らしくなったようだ」(bewiivje「妻・主婦らしくなる, 所帯じみる」の過去分詞)(ib. 204 正書法変更)

Hoe binne jimme befeeste? 「君たちはお祭りが終わってどんな気分だい」(befeastje「祭りの後で(... という) 気分になる」の過去分詞)(Zantema 1984: 61)

Mem *is goed behúshimmele*. 「母は立派に家の大掃除ができた」(behúshimmelje「家の大掃除する」の過去分詞)(Hoekstra 1998: 146 変更)

☞ この be- の用法は, オランダ語では bereisd (フ. bereizge), ドイツ語では bereist (同左), bewandert (本来, viel gewandert の意味) など, 少数の語にとどまる。

(i) 再帰動詞化

be-動詞が再帰動詞に転じる語が少数ある。これは他動詞の自動詞化に準じて理解することができ, 意味的にも主語が変化を被る点で能格動詞(非対格動詞)に類似している。

jin bedrinke 「酔っ払う」(drinke 「飲む」)

jin besûpe 「酔っばらう」(sûpe 「(... を) がぶ飲みする, (動物が ... を) 飲む」)

jin bejaan 「赴く, 関係する, 屈する」(jaan 「与える」)

Men hoecht *jin* net nei Amerika te *bejaan*. 「アメリカには行く必要はない」(jin bejaan) (WFT 2/1986: 11 変更)

再帰動詞のほかに, 自動詞(能格動詞)としても用いる be-動詞がある。

beda(a)rje/jin beda(a)rje 「落ち着く, (症状が) おさまる」(*da(a)rje は存在しない)

Bedarje (dy) wat. 「少しは我慢しなさい」 (WFT 1/1984 : 268 変更)

{*De pine/It hoastjen/De koarts*} *is aardich bedarre. 「{痛み/せき/熱} がだいぶおさまった」* (WFT 1/1984 : 268 変更)

be-動詞が他動詞・再帰動詞・自動詞 (能格動詞) の3通りに用いる語もある。

bewege 「動かす (他動詞), 動く (自動詞 (能格動詞))」/jin bewege 「動く (再帰動詞)」 ((稀: wege 「動く」)

(i) wat+be-動詞 (+en bedwaan)

be-動詞は wat 「何を, 何と」を含む文, とくに疑問文や感嘆文で嫌悪・驚嘆・好奇心の意味を表わす。この用法は他の用法と異なって, ほとんどの動詞について可能である (Dijkstra 1900-11 : 106)。wat は「何を」という意味の直接目的語よりも, むしろ「何で (また ... なのか), 何と (まあ ... なんだろう)」という意味で副詞的にはたらいっており, be-動詞は他動詞よりも, むしろ動作主を主語とする非能格動詞 (エ. unergative verb) としての自動詞に近い。この be- の用法は動詞の語彙的な意味を変更するのではなく, 話法的ニュアンスを伴うと言える。

さらに, この be- の用法には音韻論的な効果もあると考えられる。つまり, 無アクセントの接頭辞 be- を動詞につけることによって, それとの対比から動詞語幹のアクセントが強調され, 話者の感情がそれだけ表現しやすくなると言える。

Wat sil men bereedride mei sok striemin iis? 「何でまた, こんなひどい氷のときにスケートをしようっていうんだ」 (reedride 「スケートをする」) (Tamminga 1963 : ib. 204 正書法変更)

Wat silst no al betrouwe, jonge, do bist noch fierste jong! 「何で今もう結婚しようなんていう気になるの, お前 (=男の子に向かって), まだ若すぎるじゃないか」 (trouwe 「結婚する」) (ib. 204 正書法変更)

Men soe sizze, wat behúshimmelet sa'n minske de hiele dei! 「あの人ったら, 何とまあ一日中, 家の大掃除をしてるんだらうねえ (=必要ないのに)」 (húshimmelje 「家の掃除をする」) (ib. 204 正書法変更)

① wat+be-動詞+en bedwaan (疑問文・感嘆文)

‘en bedwaan’ (en 「そして」, dwaan 「する」) を上記の用法の be-動詞に並列させて、継続・強意のアスペクト (duratyf/yntensyf aspekt, Tamminga (1963:204)) を示すことがある。

Wat bemûskopje en bedogge jimme dochs? 「おまえたちはいったい何をひそひそ話してるんだ」 (mûskopje 「ひそひそ話をする」) (Zantema 1984:60)

Ik koe net ferstean wat dat âld minske beëamele en bedie. 「私はあのばあさんが何をあんなにこぼしていたのか、わからなかった」 (eamelje 「小言・愚痴を言う」) (Tamminga 1963:36 正書法変更)

② wat+be-動詞+en dwaan (疑問文・感嘆文)

bedwaan が be- を欠くこともある。

Wat soe er der allegear bestuiterje en dwaan? 「彼はあそこで何をあんなにつまづいたりしてるんだろう」 (stuiterje 「つまづく」) (ib. 204 変更)

③ wat+be-動詞 en bedwaan (譲歩文)

譲歩文 (al wat 「どんなに...しても」) で用いることもある。

Al wat de man ek berôp en bedie, it bist gong net fuort. 「その男が何を叫んでみても、けものは立ち去らなかった」 (roppe 「叫ぶ」) (WFT 1/1984:287 正書法変更)

④ be-動詞+en bedwaan

次の文は wat を含まず、平叙文で「be-動詞+en bedwaan」を用いている例である。hielwat 「たくさん」、hielendal 「完全に」という程度を強める語が共起しており、‘en+bedwaan’ は、先行する be-動詞の表わす動作に継続・強意アスペクトの意味を加える手段として用いている (WFT 1/1984:287)。

Der is hielwat bepraat en bedien. 「山ほどたくさん議論がしつくされた」 (prate 「話し合う、議論する」, 受動態) (Zantema 1984:60 変更)
Syn hân wie hielendal beblet en bedien. 「彼の手はまったく血だらけ

になっていた」(bliede「血で汚す」, 受動態) (Tamminga 1963 : 36 正書法変更)

⑤ be- のない動詞+en dwaan

「be- のない動詞+en dwaan」でも動作の継続・強意は表現できる。ただし, *「be- のない動詞+bedwaan」は許されず, bedwaan はつねに be-動詞とともに用いる (ib. 36)。

Jimme moatte net altyd sa *tsiere en dwaan*. 「おまえたちはそんなにいつもけんかばかりしてはいけないよ」(tsiere「けんかする」) (ib. 36 正書法変更)

Hja *wrotte en die fan moarns ier oant jûns let*. 「彼女は朝早くから夜遅くまであくせく働きまくっていた」(wrotte「あくせく働く」) (ib. 36 変更)

Hat se net jierrenlang har sike âlden oppast en dien? 「彼女は何年も病気の両親をいろいろ世話していたのではなかったのか」(oppasse「世話する, 注意する」) (ib. 36 変更)

以上のことをまとめると, be- の付加は嫌悪・驚嘆・好奇心などの話者の強い感情という話法的ニュアンスを伴い, 継続・強意のアスペクトを示す 'en+dwaan' にも be- を付加して 'en+bedwaan' とすることがあると言える。

☞ この be- の用法はオランダ語とドイツ語には見られない。

(k) alles など+be-動詞

be-動詞は少数の動詞について alles 「すべて」などを目的語として, 軽蔑などの否定的な評価の意味を込めて用いることがある。Dijkstra (1900-11 : 106) はこの be- の用法は西フリジア語に特徴的 ('kenmerkend Friesch', ib. 106) であると述べている。alles は, (i) の wat と同様に, 「やたらに, 何でもかんでも」のような感情的ニュアンスを伴った副詞的なはたらきをしており, (i) と同様に, be- は動詞の語彙的な意味を変更するのではなく, 話法的なニュアンスを表現すると言える。

Dat fanke *belypt alles*. 「あの娘ったら, 何でもかんでもめそめそするん

だから」(lipe「めそめそ泣く」)(Dijkstra 1900-11:106 正書法変更)
 Do moatst *alles* net sa *begnize*.「おまえは何でもそんなふうになんて
 笑ったりしてはいけません」(gnize「せせら笑う」)(ib. 106 正書法変更)
 Dy keardel *beflokt alles en elkenien*.「あいつはなんでもかんでも、ど
 んなやつにも悪口を言う」(flokke「悪口を言う」)(Hoekstra 1998:204
 正書法変更)

☞ この be- の用法はオランダ語とドイツ語には見られない。

(1) 複数の用法をもつ be-動詞

以上のような be- の多様な用法を一つの動詞が表現する例も少なくない。

① be-+fytse「自転車に乗る」

Wy kinne dat lange ein net *befytse*.「私たちはあの長い距離を自転車
 では行けない」(到達・遂行)(Tamminga 1963:202 変更)

Hja koe dy man net *befytse*.「彼女はその男の人に自転車で追いつく
 ことができなかった」(到達・遂行)(ib. 202 変更)

Ik koe de waarmte wol *befytse*.「私は自転車に乗ったら暑くなるか
 もしれない」(不足・不快感の発生)(Hoekstra 1998:145 変更)

Wat silst *befytse*, nim dochs in auto!「君は何をまた自転車で行こう
 なんて思ってるんだね。車を使いなさいよ」(wat+be-動詞(疑問文・
 感嘆文))(Tamminga 1963:202 正書法変更)

② be-+rinne「歩く, 走る」

Terherne is yn in healoere te *berinnen*.「テルヘネは30分で歩いて
 着ける」(到達・遂行)(Dykstra 2002:42 変更)

Wy *hawwe* toarst *berûn*.「私たちは歩いてのどが渴いた」(不足・不
 快感の発生)(Hoekstra 1998:145 変更)

Ik begryp net *wat* er tsjintwurdich *berint*!「私は彼が何をこの頃、走
 りまわっているのかわからない(=彼はどうしたんだろう)」(wat+
 be-動詞(疑問文・感嘆文))(Dijkstra 1900-1911:106 変更)

③ be-+sliepe「寝る」

It bêd wie net *besliept*.「そのベッドは人が寝たことがなかった(=

寝られたことがなかった, 新品だった; 受動態)」(他動詞化) (WFT 2/1986: 156)

Hy hat *in frommes besliept*. 「彼は女と寝た」(他動詞化) (Zantema 1984: 86 変更)

Besliep jo der fannacht earst ris oer. 「今晚, 寝てそのことを少し考えてみなさい」(再帰動詞化) (WFT 2/1986: 156 正書法変更)

Ik ha *pine yn 'e holle besliept*. 「私は寝たら頭が痛くなった」(欠乏・不快感の発生) (WFT 2/1986: 156)

Us útfanhûzers seine, dat se *goed besliept wiene*. 「うちに泊まった客さんたちはよく寝られたと言っていた」(過去分詞で使う自動詞(能格動詞)の be-動詞) (Tamminga 1963: 204 正書法変更)

(m) まとめ

接頭辞 be- の用法は次のようにまとめられる。

be-動詞には語形的・意味的に対応する be- のない動詞を欠くものがあり, そのような be-動詞は語彙的に独立の 1 語として固定している。しかし, このほかに, be- には動詞に付与する一定の役割がある。

be- の基本的な役割は, 対象への「直接的影響」(ド. *affectedness* 「被作用性」)と動作の「達成」(エ. *achievement*) という意味的な修飾を動詞に施すことにある。その典型的な用法は, 前置詞句目的語を名詞句直接目的語に変えて, 自動詞を「他動詞化」することである。それは「代換表現」によって, 目的語の交替を引き起こすことにつながる。「中へ入れこむ」という意味の be-動詞も, これに準じて理解できる。動作の「効果・充足」「到達・遂行」を表わす be-動詞も同様である。この be- の用法は, 意味的には動作の影響が対象に直接的・全体的に及び, 動作の達成を明確に表現する。

ただし, この be- の用法は「項構造」(エ. *argument structure*) を保持しながら, 統語的に「結合価」(エ. *valency*) を変更するものであり, 動詞の「明示的意味」(エ. *denotation* 「外延」) を変更するものではない。ドイツ語やオランダ語の be- はほぼこの範囲に収まる。それでも, 「中へ入れこむ」という意味の be-動詞は両言語にはとくに認められず, 「到達・充足」「到達・遂

行」の意味も部分的にしか見られない。

ところが、西フリジア語の be- には動詞の明示的意味を変える用法がある。その一つは、動作の達成による対象の変化で間接的にもたらされる結果を「収益・獲得」、「不足・不快感の発生」という意味として、新たに be-動詞の直接目的語として取り込む用法である。たとえば、trouwe「結婚する」と fytse「自転車で行く」を例に取れば，betrouwe は「人と結婚することで〈財産を〉得る」，befytse は「自転車で行くことで〈のどの渇き〉を覚える/〈体のほてりを〉覚える」のように，結婚の本来的意義とは無縁で付随的にもたらされるにすぎない取得物や，主語である動作主自体の生理的な変化を新たに直接目的語とする他動詞を派生することになる。両者の目的語は trouwe「結婚する」，fytse「(自転車で) 行く」と直接的な関係は何もない。この be-の用法は，オランダ語とドイツ語ではほとんど見られない。

対象への直接的影響と動作の達成という be- の意味的役割は，西フリジア語では他動詞の派生という統語的な枠を越えて，対象の変化とその結果を表現することがある。それが「自動詞（能格動詞）の be-動詞」である。ここでは動作主はもはや表現されず，本来，他動詞の目的語に相当し，動作によって変化を被る対象自体が be-動詞の主語となって現われる。この主語の変化は顕著な結果を残すので，過去分詞は形容詞的に述語として定着しやすい（「過去分詞で使う自動詞（能格動詞）の be-動詞」）。

さらに，西フリジア語の be- に特有の用法として，動詞の結合価も明示的意味もともに変更しない用法がある。それが動作主を主語とする「wat+be-動詞（+en bedwaan）」と「alles など+be-動詞」である。これは動詞の種類に関係なく広く用いることができ，疑問文・感嘆文で嫌悪・驚嘆・好奇心，あるいは軽蔑などの意味を伴うことが多いように，強い感情的表現を形成する。ここでは be- の本来の役割が希薄になり，もっぱら話法的ニュアンスの表現手段になっている。つまり，具体的な動作の達成と対象の変化による何らかの結果が，現実世界ではなく，話し手の気持ちの中で主観的に期待され，実現されることによって，たんなる強調表現になり，動詞の語彙的意味とは無関係に多用されるに至ったと考えられる。ちなみに，「他動詞化」「到達・

遂行」「自動詞（能格動詞）の be-動詞」でも、すでに述べたように、話法的ニュアンスを部分的に伴う場合がある。

このように、「対象への直接的影響と動作の達成」という意味的修飾を動詞に施す be- の本来的な役割は、西フリジア語では動詞の結合価の変更という統語的役割にとどまらず、対象の変化とその結果の表現手段として動詞の明示的意味を変え、目的語が変化を被る「他動詞化」だけでなく、他動詞の目的語に相当する主語自体が変化を被る「自動詞（能格動詞）の be-動詞」にまで及んでいる。そして、さらに、個々の動詞に特有の語彙的な意味を越えて、強い感情表現として話法的ニュアンスを広範囲にわたって表現する「wat+be-動詞（+en bedwaan）」と「alles など+be-動詞」の用法をもつに至ったと考えられる。

☞ 上記の be- の意味的連関は、他の言語でも類似した現象を想起させる。身近な例として日本語を例に取れば、「...してしまう」は、「しまう（＝片付ける）」という語彙の意味から完了アスペクトの表現に発達し、それが「ガラスを割ってしまった」のように、「ガラスを割った」にたいして、意図せずに不本意に起こった出来事への無念・後悔の気持ちを表現する話法的ニュアンスを伴うことが多い。

ゲルマン語ではどうだろうか。北ゲルマン語では、本来、接頭辞を伴った動詞は存在しなかった。現代語の be-動詞をはじめとする接頭辞動詞は、中世のハンザ同盟時代に中低ドイツ語から借用したものであり、高さアクセントや声門閉鎖でも北ゲルマン語古来の語とは別のパターンを示す。西ゲルマン語では、古来の接頭辞による接頭辞動詞がかなり衰退した英語を除けば、ドイツ語、オランダ語、西フリジア語では、個々の接頭辞の種類や用法に差はあるものの、接頭辞動詞という範疇は同程度に発達していると言える。その中で、西フリジア語の be- がこれほどその用法を発達させた理由は、ge- の早期の衰退と関係があると筆者は考える。

中高ドイツ語(ド. Mittelhochdeutsch)の ge- の用法は西フリジア語の be- の用法に類似している。ge- は本来、個々の動詞の意味に応じて動作の完了の意味を付与する接頭辞だったが、それが完了アスペクトの表現として広く文法化されるに至った。過去分詞に規則的に付加されるようになったのは、その結果である。語彙的に独立の ge-動詞として固定したものを除けば、中高ドイツ語では完了アスペクト以外に、話法的ニュアンスを伴ったさまざまな構文で、不定詞・現在形・過去形について、たんに動作の実現を話者の主観的な立場から強調する手段として、文体的な効果の上からも多用

されていた(清水 1984)。また、「wat+be-動詞(+en bedwaan)」の箇所
で述べたように、無アクセントの be- が動詞語幹のアクセントを対比的に
強調する役目を果たすと考えられるのと同様に、無アクセントの ge- は韻
文において抑音部(弱音部, ド. Senkung)を作り出し、それとの対比で動
詞語幹のアクセントを揚音部(強音部, ド. Hebung)としてきわ立たせる
という韻律上の役目を果たしていたと言える。

一般に、発話には感情を伴う強調表現がつきものである。それに好都合な形
態的手段があれば、本来の用法を拡大して多用する傾向があり、特定の形式
が個別言語の歴史の中で顕著に現われた時代があると考えられる。大陸西
ゲルマン語に属するドイツ語では、ge- が音韻変化で消失することなく
残ったので、中世のある時期に代表的な表現手段として多用されるよう
になり、be- はこの点で二次的な地位に甘んじたと考えられる。一方、北海ゲ
ルマン語に属する西フリジア語では、ge- の語頭子音 g が口蓋化 (エ.
palatalization) によって音韻的に弱まり、消失してしまった。そこで、動
作の達成と対象への直接的影響を表現する役割を担っていた be- は、意味
的にも完了アスペクトと類似しており、ge- のかわりに多用されるに至っ
たと考えられる。西フリジア語にはドイツ語の er- に対応する接頭辞が存
在しないことも、これに拍車をかける一因になったと推定される。

以下に述べる接頭辞 fer- も、動作による対象の変化を表わす点で be- と類
似点がある。しかし、fer- は否定的な評価やマイナスのニュアンスを伴う
ことが多く、用法が限定されたと考えられる。

beäve(n)searje「成し遂げる, 実現する」⇔ferave(n)searje「めちゃくちゃ
にする, 散らす, 浪費する」(ave(n)searje「前進する, 従事する」)

bekomme「静まる, 回復する, (... の) 体に合う, 得る」⇔ferkomme「陥
る, 墮落する, 水泡に帰する, 長続きしない」(komme「来る」)

beleare「調教する, 知らせる」⇔ferleare「(習ったことを) 忘れる」(leare
「習う, 教える」)

beoardielje「判断する」⇔feroardielje「非難する, 有罪判決をする」(oardiel-
je「判断する (oer ... について)」)

betinke「熟考する」⇔fertinke「(人に) 疑いをかける」(tinke「考える」)

jin bedrinke「酔っ払う」⇔jin ferdrinke「飲みすぎて体をこわす」(drinke
「飲む」)

§ 88 非分離動詞 (2) : その他の接頭辞動詞

(1) 接頭辞 fer-

(a) fer- の意味が不明確な場合

fer- が表現する意味は多様であり、明快に総括することは困難である。

まず, fer- のない動詞との意味的な対応が不明確なものがある。

ferstean 「理解する」 ⇔ stean 「立っている, (... の状態) である」

また, 次例のように, fer- のない動詞が存在しない語もある。

ferdwine 「消える」 (*dwine は存在しない)

ferjitte 「忘れる」 (「注ぐ」という意味の別の語を除いて, *jitte は存在しない)

ferlieze 「失う」 (*lieze は存在しない)

ferniele 「減ぼす」 (*niele は存在しない)

ferrifelje 「だます」 (*rifelje は存在しない)

Se *hat* har âlden al ier *ferlern*. 「彼女は両親をすでに早くから亡くした」 (ferlieze 「失う」) (UL'S, B 1 : 9)

さらに, fer-動詞が形容詞化した過去分詞としてのみ存在する語がある。この場合, 語形的に対応する形容詞化していない fer-動詞はあっても, 意味的な対応は明確には認めがたい。

ferkâlden 「風邪をひいた」, ferlegen 「当惑した」

ferheard 「驚いた」 ⇔ ferhear(r)e 「聞き入れる ; 聞き違いをする (jin ferhear(r)e)」

ferkeard 「間違った」 ⇔ ferkeare 「変更する, 交際する」

ferneamd 「有名な」 ⇔ ferneame 「(... にちなんで) 名づける」

Hy wie der in bytsje *ferlegen* mei. 「彼はそれに少し当惑した」 (UL'S, B 3 : 17 変更)

Sokke fersen moatte in goeie bân hawwe, en ek in *ferneamde* útjouwer en boekbinder. 「そういう詩には良い装丁が必要よ, それに, 有名な出版社と製本業者も」 (UL'S, A 16 : 8)

☞ ferkâldzje 「風邪をひく」の過去分詞は ferkâlde であり, 形容詞 ferkâlden

「風邪をひいた」とは語形が異なる。なお、ferkâldzje にはほとんど「風邪(をひくこと)」という名詞的な用法しかなく、「風邪をひく」は ferkâlden wurde, 「風邪をひいている」は ferkalden wêze のように形容詞 ferkâlden を用いて表現する。「風邪」という名詞は de ferkâldens/ferkâldheid である。オランダ語には ferkâldzje にあたる fer-動詞がなく, ferkâlden にあたる形容詞などで表現する。ドイツ語は再帰動詞の er-動詞と語形的にその過去分詞にあたる語で表現する。

フ. ferkâlden wurde 「風邪をひく」

オ. verkouden worden/kou vatten 「同上」

ド. sich erkälten 「同上」

フ. ferkâlden wêze 「風邪をひいている」

オ. verkouden zijn 「同上」

ド. erkältet sein 「同上」

fer- のない動詞との明示的意味の相違がはっきりしない語もある。この場合, fer- は以下に述べるように, 本来, 動作による対象の変化を表わすが, もとの動詞がそもそも変化の意味を表わすので, 変化の完了・完結を強調するにとどまり, 明示的意味の違いには至らないとも考えられる。

ferrotsje 「腐る, 朽ちる」(rotsje 「同左」)

ferskroeie 「焦がす, 焦げる」(skroeie 「同左」)

ferslute 「擦り減らす, 消耗する, (時間を) 過ごす」(slute 「同左」)

ferstjerre 「死ぬ」(stjerre 「同左」)

fersulverje 「銀メッキを施す, 銀色にする」(sulverje 「同左」)

Pake Hindrik is in jier of wat lyn *ferstoarn*, yn 'e âldens fan 77 jier.

「ヒンドリクおじさんは1年ほど前に77歳で亡くなりました」(ferstjerre)

(ULI'S, B 11:6)

☞ 歴史的に見ると, fer- の意味が特定しにくいのは, かつての前置詞と同形の3種類の語が混合して生じた接頭辞であることとも関係がある。

(b) fer- の意味

それでも, おおまかに言って, fer- の意味には主として以下の点が認められる。つまり, fer- は be- と類似して, 対象が何らかの「変化」を被ることを表わすが, 望ましくない「否定的な評価」や「マイナスのイメージ」を伴

うことが多い。fer-動詞は他動詞または自動詞(能格動詞)である。以下、否定的な評価やマイナスのイメージの少ない順に列挙する。

① 移行・変化：装備動詞

語幹に含まれる名詞・数詞，形容詞・不定代名詞のもつ意味への移行・変化を表わす fer-動詞がある。fer- のない動詞が存在しないことが多い。be-(§ 87 (2)(c)③)の場合と同様に，「装備動詞(仮称)」(ornativen)と呼ぶ。この意味では，fer- はとくに否定的な評価やマイナスのイメージを伴うとは言えない。fer- はこの意味ではとくに生産性が高い。

i) 語幹に名詞・数詞を含む fer-動詞

ferfryskje 「フリジア語になる・する・訳す」(*fryskje は存在しない。
Frysk 「フリジア語」)

ferienje 「統合する」(*ienje は存在しない。ien 「ひとつ」)

ferstienje 「石になる・する」(*stienje は存在しない。stien 「石」)

fersûkerje 「砂糖の結晶になる」(*sûkerje は存在しない。sûker 「砂糖」)

G. A. Wumkes *hat yn 1933 it Nije Testamint ferfryske*. 「G. A. ヴムケスは 1933 年に新約聖書をフリジア語に翻訳した」(ferfryskje)

ii) 語幹に形容詞・不定代名詞を含む fer-動詞

ferâlderje 「年をとる，すたれる」(*âlderje は存在しない。âld 「年をとった，古い」)

ferbliidzje 「喜ばせる」(*bliidzje は存在しない。bliid 「うれしい」)

fergrutsje 「大きくする」(*grutsje は存在しない。grut 「大きい」)

ferienfâldigje 「簡素化・単純化する」(*ienfâldigje は存在しない。ienfâldich 「簡単な，単純な」)

feroarje 「変わる，変える」(*oarje は存在しない。oar 「別の」)

ferwylderje 「野生化する，荒れる」(*wylderje は存在しない。wyld 「野生の，荒れた」)

Dat *feroare* pas yn de 20ste ieu. 「それは 20 世紀になってはじめて変わった」(feroarje) (ULI'S, B 3 : 12)

Om de opbringst fan it lân te *fergrutsjen* wurdt in protte keunstdong brûkt. 「土地の収穫量を増大させるために、大量の人口肥料が使われる」(*fergrutsje*) (ULP'S, B 9:14)

次の語には *fer-* のない動詞が存在する。この場合、*fer-*動詞はもとの動詞と比べて、抽象的・専門的な意味になる傾向がある。

ferbetterje 「(基準を満たすように)訂正・修正する」(*betterje* 「(健康・天候などが)回復する, 改良する, 改心させる」, *better* 「より良い」)
ferdjipje 「深くする, (精神的・質的に)深化させる」(*djipje* 「(... の) 深さを測る」, *djip* 「深い」)

ferklearje 「説明する, 解明する」(*klearje* 「準備する, 掃除する」, *klear* 「澄んだ, 明確な, 準備ができた」)

ferwaarmje 「暖房する」(*waarmje* 「暖める」, *waarm* 「暖かい」)

Der binne gâns minsken, dy't alles *ferbetterje* wolle, útsein harsels. 「自分自身を除いて、何でも直したがる人々はたくさんいる (ことわざ)」(*ferbetterje*) (Beintema 1990:36)

② 更新・修正

この意味では、*fer-* はとくに否定的な評価やマイナスのイメージを伴うとは言えない。

ferbouwe 「建て替える」(*bouwe* 「建てる」)

ferfange 「(... に) 取って代わる」(*fange* 「取る, つかまえる」)

ferfluorje 「(床を) 張り替える, (道を) 舗装し直す」(*fluorje* 「(床を) 張る, (道を) 舗装する」)

ferheakje 「別の留め金・ホックに掛け替える」(*heakje* 「留め金・ホックに掛ける」)

ferhúzje 「引っ越しする」(*húzje* 「住む」)

ferklaaie 「着替えさせる」(*klaaie* 「着せる」)

ferkleurje 「変色する」(*kleurje* 「色づく, 彩色する」)

fermeitsje 「改造する, (服のサイズなどを) 直す」(*meitsje* 「作る」)

ferplantsje 「植え替える」(*plantsje* 「植える」)

ferrinne 「別の方向へ進む」 (rinne 「歩く, 走る」)

fersoalje 「(靴の) 底革を張り替える」 (soalje 「(靴の) 底革を張る・張り替える」)

Ik fyn de boksen eins wat te lang. — Wy kinne dy foar jo wol *fermeitsje*. 「ズボンの丈がちょっと長すぎるような気がするんですが」「それはお客様のためにお直しいたします」 (*fermeitsje*) (Bangma²: 40)

Ik hoopje op bettere tiden yn myn *ferboud* bedriuw. 「私は自分の改築した (= された) 店の営業により良い未来を希望している」 (*ferbouwe*) (ULF'S, A 13: 8 変更)

③ 目標・成果

この意味では, *fer-* はとくに否定的な評価やマイナスのイメージを伴うとは言えない。

ferlibje 「生き延びる」 (*libje* 「生きる」)

fernachtsje 「夜を明かす」 (*nachtsje* 「夜になる (非人称動詞 *it nachtet*)」)

ferprate 「話をつける, 話し合って許す」 (*prate* 「しゃべる」)

ferride 「(賞品・賞金を求めて) スケートや自転車競技をする」 (*ride* 「(車・自転車などで) 行く, スケートをする」)

fersile 「(賞品・賞金を求めて) ヨットレースをする」 (*sile* 「ヨットに乗る」)

ferwinne 「打ち勝つ, 征服する」 (*winne* 「勝つ」)

Dat is wol in misferstân, mar wy wolle it wol mei har *ferprate*. 「それはたぶん誤解でしょうが, 私たちは彼女と話して折り合いをつけたと思います」 (*ferprate*) (Zantema 1984: 258 変更)

④ 除去・移動, 放出

変化を受ける対象が離れて移動することを示す。この *fer-* はそれほど強く否定的な評価やマイナスのイメージを伴うとは言えない。

i) 除去・移動

ferbergje 「隠す」(bergje 「しまう」)

ferbringe 「向こうへ持っていく」(bringe 「持っていく」)

ferdriuwe 「向こうへ追い払う」(driuwe 「追いたてる」)

ferfiere 「運搬する, 輸送する」(fiere 「導く, 運ぶ」)

ferpleatse 「移す」(pleatse 「据える」)

fersmite 「退ける, 捨てる」(smite 「投げる」)

ferswije 「秘密にする, 公表しない」(swije 「黙る, 黙っている」)

fertarre 「消化する・される」(tarre 「(...を糧として) 生きる」)

Yn myn tiid waard de hûnekarre brûkt, om fracht te *ferfieren* yn stee fan sa'n frachtauto. 「私の時代には, 荷物を運搬するのに, そんなトラックみたいなものかわりに, 犬にひかせる荷車が使われた」(ferfiere) (ULFS, A 18: 8 変更)

Jo moatte it foar him *ferswije*. 「あなたはそれを彼には秘密にしなければいけません」(ferswije)

ii) 放出

ferboelguodzje 「競売にかけて売る」(boelguodzje 「競売をする, 競売で買う」)

ferhiere 「賃貸する」(hiere 「賃借りする」)

ferkeapje 「売る」(keapje 「買う」)

Faust *hat* syn siele oan 'e duvel *ferkocht*. 「ファウストは自分の魂を悪魔に売った」(ferkeapje) (WFT 5/1988: 184)

⑤ 消失・喪失, 消費・浪費, 損害・破滅

変化を受ける対象が離れて移動することを示すが, 同時に否定的な評価やマイナスのイメージが加わる。それが強まる順に以下にまとめる。

i) 消失・喪失

fergean 「消滅する」(gean 「行く, 去る」)

ferkleurje 「色あせる」(kleurje 「色づく, 彩色する」)

ferleare 「(習ったことを) 忘れる」(leare 「習う, 教える」)

ferreine「雨で台無しになる」(reine「雨が降る(非人称動詞 it reint)」
ferwaskje「洗って色があせる」(waskje「洗う」)

Mei kleurd waskguod moat men altyd oppasse; it wol gauris
ferwaskje en it oare guod ferkleurje litte.「色のついた洗濯物にはつ
ねに注意が必要です。洗うと色が落ちて、ほかのものを変色させたり
することがあります」(ferwaskje)(ferkleurje「変色する」は②「更
新・修正」に含まれる)(WFT 5/1988:337)

De wedstriid is *ferreind*.「競技は雨で流れた」(ferreine)(Dykstra
2000:152)

ii) 消費・浪費

ferbrûke「消費する、使い果たす」(brûke「使う」)
ferdobbelje「賭け事で損をする」(dobbelje「賭け事をする」)
ferdokterje「(多額の金を)医療に費やす」(dokterje「医者にかかる」)
ferdrinke「(金を)飲んで使い果たす」(drinke「飲む」)
fersile「(金・時間を)ヨット乗りして使い果たす・過ごす」(sile「ヨッ
トに乗る」)
ferspylje「(賭け事で)失う、(時間を)遊んで使い果たす・過ごす」
(spylje「遊ぶ」)

Ik *ha* wol fjouwertûzen gûne *ferdoktere* mei dy seare earm.「私はそ
の腕の痛みで医療費に優に4千ギルダールはかかった」(ferdokterje)
(WFT 5/1988:126 変更)

iii) 損害・破滅

ferbaarne「焼失・焼却する、日焼け・やけどする、焦がす・焦げる」
(baarne「燃やす、燃える」)
ferdrinke「溺死する」(drinke「飲む」)
ferdwale「道に迷う」(dwale「さまよう」)
ferhongerje「餓死する」(hongerje「空腹である」)
ferkomme「陥る、墮落する、水泡に帰する、長続きしない」(komme
「来る」)

fertoarst(g)je 「喉が渴いて死ぬ」(toarst(g)je 「喉が渴く」)

Dy brij is alhiel *ferbaarnd!* 「あのおかゆはまったく焦げてしまったぞ」(ferbaarne) (WFT 5/1988 : 99)

Sy is *ferkomd* yn ûndogenskens. 「彼女はきわめて行儀が悪い (= 行儀の悪さに陥った)」(ferkomme) (Zantema 1984 : 252 変更)

Dat *ferkomt* wol. 「それは長続きしないだろうよ (= つきあいなど)」(ferkomme) (Sytstra/Hof 1925 : 129 正書法変更)

⑥ 過重・過失：再帰動詞

この fer- 動詞は否定的な評価やマイナスのイメージを明確に伴い、再帰動詞である。fer- のない動詞との意味的な関連は一般に明確である。

i) 過重

jin ferarbeidzje 「過労で体をこわす」(arbeidzje 「働く」)

jin ferdrinke 「飲みすぎて体をこわす」(drinke 「飲む」)

jin ferha(a)stigje 「急ぎすぎる、あわてる」(jin ha(a)stigje 「急ぐ」)

jin ferite 「食べすぎて体をこわす」(ite 「食べる」)

jin ferskreppe 「過労で体をこわす」(skreppe 「あくせく働く」)

jin ferskuorre 「過労で体をこわす」(ferskuorre 「引き裂く」, skuorre 「(引き)裂く」)

Myn man *hat him* alhiel *ferskrept* en *ferskuord*. 「私の夫はすっかり過労で健康をそこねてしまいました」(jin ferskreppe/jin ferskuorre) (Sipma 1949 : 68 変更)

「過重」の意味は非分離の接頭辞 oer- でも表わすことがある。

jin ferite~jin oerite 「食べすぎて体をこわす」

jin ferarbeidzje~jin oerarbeidzje 「過労で体をこわす」

jin ferskreppe~jin oerskreppe 「過労で体をこわす」

jin ferha(a)stigje~jin oerha(a)stigje 「急ぎすぎる、あわてる」

ちなみに、「過重」の意味の再帰動詞以外に、次の動詞も fer- と oer- を同じ意味で用いる。ただし、fer- 動詞のほうが古風であり、oer- 動詞

が一般的である (Hoekstra 1998 : 147)。

ferbringe～oerbringe 「向こうへ持っていく」

ferlibje～oerlibje 「生き延びる」

fernachtsje～oernachtsje 「夜を明かす」

ferwinne～oerwinne 「打ち勝つ, 征服する」

☞ これは, 古フリジア語 (Aldfrysk) で for-(フ. fer-) を ur-(フ. oer-) と同じ意味で用いることがあったことと関係がある (Sytstra/Hof 1925 : 129)。

☞ 「過重」の意味はふつうオランダ語では zich over-動詞, ドイツ語では sich über-動詞で表現する。ともに非分離の接頭辞動詞である。

フ. jin ferite～jin oerite 「食べすぎる」/jin ferarbeidzje～jin oearbeidzje 「過労で体をこわす」

オ. zich overeten 「同上」/zich overwerken 「同上」

ド. sich überessen 「同上」/sich überarbeiten 「同上」

次の語でも, 西フリジア語の fer-/oer- にはオランダ語の over-とドイツ語の über- が対応する。

フ. ferlibje～oerlibje 「生き延びる」/fernachtsje～oernachtsje 「夜を明かす」/ferwinne～oerwinne 「打ち勝つ, 征服する」

オ. overleven 「同上」/overnachten 「同上」/overwinnen 「同上」/overbrengen 「同上」

ド. überleben 「同上」/übernachten 「同上」/(besiegen/überwinden 「同上」)

ii) 過失

jin ferhear(r)e 「聞き違いをする」(hear(r)e 「聞く」)

jin ferrekkenje 「計算違いをする」(rekkenje 「計算する」)

jin fersile 「ヨットに乗って方向を見失う」(sile 「ヨットに乗る」)

jin fersinne 「間違える, 思い違いをする」(sinne 「思案する」)

jin fersjen 「見誤る, 見落とす」(sjen 「見る」)

jin fersjonge 「間違って歌う」(sjonge 「歌う」)

jin ferskriuwe 「書き誤る」(skriuwe 「書く」)

jin fertaaste 「つかみ損なう, 間違ってつかむ, 不正に手を出す」
(taaste 「手探りする」)

It is better *jin te fersinnen* as *jin te fertaasten*. 「悪いことに手を染めるよりも、間違うほうが良い(ことわざ)」(*jin fersinne/jin fertaaste*) (Beintema 1990 : 38)

☞ オランダ語とドイツ語に比べて、西フリジア語には *fer-* による過失の意味の再帰動詞が多い。

フ. *jin ferrekkenje* 「計算違いをする」/*jin ferskriuwe* 「書き誤る」

オ. *zich verrekenen* 「同上」/*zich verschrijven* 「同上」

ド. *sich verrechnen* 「同上」/*sich verschreiben* 「同上」

フ. *jin fersile* 「ヨットに乗って方向を見失う」/*jin fersjonge* 「間違って歌う」

オ. なし/なし

ド. なし/なし

⑦ 敵意・否定

否定的な評価やマイナスのイメージを明確に伴う。

ferachtsje 「軽蔑する、軽視する」(*achtsje* 「尊敬する、留意する」)

ferbiede 「禁止する」(*biede* 「提供する」)

fergunne 「ねたま、認めない、分け与えない」(*gunne* 「ねたまない、認める、分け与える」)

ferliede 「間違った方向に導く、誘惑する」(*liede* 「導く」)

feroardielje 「非難する、有罪判決を下す」(*oardielje* 「判断する」(*oer ...* について))

ferriede 「裏切る」(*riede* 「忠告する」)

fertinke 「(人に) 疑いをかける」(*tinke* 「考える」)

ferwinskje 「呪う」(*winskje* 「願う」)

Earst ferachtet men it, dan besjocht men it, dan laket men der om, dan docht men it sels. 「人間というものは初めは軽蔑して、それから見て、それからそれを笑って、それから自分でやるものだ(ことわざ)」(*ferachtsje*) (Beintema 1990 : 36)

Ferbiede en dochs gewurde litte jout dôfhûdige bern. 「禁止して、それでもやらせておくと、言うことを聞かない子供ができる(ことわざ)」(*ferbiede*) (Beintema 1990 : 36)

- ☞ 接頭辞 *mis-* をつけて、少なくとも類似した意味を表わす語もある ((4) 参照)。

fergunne 「ねたむ、認めようとし、分け与えない」～*misgunne* 「同上」

ferliede 「間違った方向に導く、誘惑する」～*misliede* 「間違った方向に導く、だます」

ferriede 「良い忠告を与えそこねる、裏切る、密告する」～*mis|riede* 「良い忠告を与えそこねる、言い当てそこねる」

(c) 複数の意味をもつ語

be-(§ 87) の場合と同様に、ひとつの動詞が *fer-* の複数の意味を表わすことが珍しくない。

- i) *ferdrinke* 「(金を) 飲んで使い果たす (消費・浪費), 溺死する (損害・破滅)」/*jin ferdrinke* 「飲みすぎて体をこわす (過重: 再帰動詞)」
⇔*drinke* 「飲む」
- ii) *ferride* 「運転して移動させる (除去・移動), (賞金・賞品を求めて) スケート・自転車競技をする (目標・成果), (金を) 旅行で使い果たす (消費・浪費), 車の通行で道がいたむ (損害・破滅)」/*jin ferride* 「運転して道に迷う, スケートをして疲れる (過重: 再帰動詞)」
⇔*ride* 「(車・自転車などを) 運転する, スケートをする」
- iii) *ferrinne* 「別の方向へ進む (更新・修正), (時間を) 歩いて使い果たす・過ごす (消費・浪費), (時間・出来事が) 過ぎ去る (消失・喪失), 徐々に衰える・落ちぶれる (損害・破滅)」/*jin ferrinne* 「歩いて道に迷う (過失: 再帰動詞)」
⇔*rinne* 「歩く, 走る」
- iv) *fersliepe* 「(時間を) 眠って使い果たす・過ごす (消費・浪費), (病気・害悪・酩酊が) 眠っておさまる (消失・喪失)」/*jin fersliepe* 「寝過ごす (過失: 再帰動詞)」
⇔*sliepe* 「眠る」
Dat fersliept wol. 「それは寝ればなおるよ・忘れるよ」(Zantema

1984: 263)

- v) ferprate 「しゃべって (時間) を使い果たす・過ごす (消費・浪費),
(... のことを) 話し合う・話をつける, 話し合って許す (目標・成果)」/
jin ferprate 「しゃべって秘密を漏らす (過失: 再帰動詞)」
⇒prate 「しゃべる, 話す」

(2) 接頭辞 te-

(a) te-動詞の意味

接頭辞 te- は一般にすでに「分解・破壊」の意味を含む動詞について、その意味をさらに強調する。te-動詞は文語的であり、te- は生産的な動詞接頭辞とは言えない。高年齢層の話者は若年齢層の話者よりも te-動詞を比較的多く用いる傾向がある (Tamminga 1973: 90)。

tebarste 「はじけて飛び散る, ひびが入って割れる」(barste 「はじける, ひびが入る」)

teboarje 「(土壌を) 掘る・ボーリングしていためる」(boarje 「(土壌を) 掘る・ボーリングする」)

tedolle 「(土壌を) 掘って・掘り出していためる」(dolle 「(土壌を) 掘る・掘り出す」)

tegnauwe 「かみちぎる」(gnauwe 「(前歯で) かむ」)

teraffelje 「ひどくほつれる, ひどくほつれさせる」(raffelje 「ほつれる, ほつれさせる」)

teslope 「取り壊しつくす, (健康などを) ひどくむしばむ」(slope 「取り壊す, (健康などを) むしばむ」(jin teslope/jin slope 「(自分の) 体をこわす」のように再帰的にも用いる))

tespjalte 「分裂させる, 深い裂け目を入れる」(spjalte 「割る, 裂く」)

tewaaie 「風で散る・だめになる」(waaie 「風が吹く」)

De beammen nimme elkoars hân, *teknobbe* en *tewaaid*. 「木々は各々の手を取り合う, 枝を折られ, 風に飛ばされて」(*teknobbe* 「すっかり短くする, *tewaaie*) (Tamminga 1973: 93 正書法変更)

Do moatst *dy dêr net teslope* by dy bakker, jonge! 「ねえ (=男の子に向かって), おまえはあそこ, あのパン屋のところで, 働きすぎて体をこわしてはいけないよ」 (*jin teslope*) (ib. 92 正書法変更)

(b) *te*-動詞と *fer*-動詞

te-動詞は意味的に *fer*-動詞と重なることが多いが, *te*-動詞のほうが文体的にいかめしい印象を与え, 分解・破壊の意味をより強調する (Hoekstra 1998: 148, Tamminga 1973: 91)。つまり, *te*-動詞は *fer*-動詞に取って代わられつつあると言える (なお, *útinoar* を分離成分とする分離動詞が類似の意味を表わすこともある)。以下は *fer*-動詞が通常よく使う語として併存する *te*-動詞の例である。

tebite~*ferbite* 「かみ砕く」 (*bite* 「かむ」)

tebrekke~*ferbrekke* 「砕く」 (*brekke* 「割る, 割れる」 (*ferbrekke* には他の意味もある))

tegroeie~*fergroeie* 「曲がって・奇形に成長する」 (*groeie* 「成長する」)

tekankerje~*ferkankerje* 「(樹木などが) 壞疽(えそ)にかかる, 朽ち果てる」 (*kankerje* 「朽ちる, むしばまれる」)

terotsje~*ferrotsje* 「腐り果てる」 (*rotsje* 「腐る」)

tesinge~*fersinge* 「焦がして・焼いてだめにする, 焦げて・焼けてだめになる」 (*singe* 「少し焦がす・焼く, 少し焦げる・焼ける」)

teskuorre~*ferskuorre* 「ずたずたに切り裂く」 (*skuorre* 「切り裂く」)

Dy âld beam is hielendal tekankere. 「あの老木はすっかり朽ち果ててしまった」 (*tekankerje*) (Tamminga 1973: 91 正書法変更)

(c) その他

te- のない動詞が存在しないか, 稀にしか用いないことがある。

tebrizelje/*ferbrizelje* 「粉碎する」 (*brizelje* 「砕く」, Hoekstra (1998: 148) によれば, **brizelje* は存在しない。Zantema (1984) なし。ただし, WFT 3/1986: 223 あり)

te- の付加で統語的な変更が生じることもある。この場合, *te*- の付加によって直接目的語を伴う他動詞になる。

tehaffelje 「(…を) 持続的にかじっていたため」(haffelje 「持続的にかじる (op…を)」)

De knyn *haffele op 'e woartel*. 「ウサギはニンジンをかじった」(haffelje) (Hoekstra 1998:148)

De knyn *tehaffele de woartel*. 「ウサギはニンジンをかじってだめにした」(tehaffelje) (ib. 148)

次の語は te- の付加で統語的な変更が生じるが, te- のない動詞が分解・破壊の意味をとくに含まず, fer-動詞が併存する語である。

tefalle/ferfalle 「(…を) 転んでけがする」(falle 「転ぶ」, jin tefalle 「転んでけがをする」) のように再帰的にも用いる

tereine/ferreine 「(…が) 雨で台無しになる」(reine 「雨が降る (非人称動詞 it reint)」)

tesitte/fersitte 「すわることで (…に) しわをつける・いためる」(sitte 「すわっている (op…の上に)」)

Hy *hat him danich tefallen*. 「彼は転んでひどくけがをした」(jin tefalle 再帰動詞) (Tamminga 1973:93 正書法変更)

De tulpen *wiene tereind*. 「チューリップは雨でだめになってしまった」(tereine 自動詞) (Hoekstra 1998:148 変更)

Hja *hat har nije jurk alhiel tesitten*. 「彼女はすわったせいで, 新しいドレスにすっかりしわをつけてしまった」(tesitte 他動詞) (Zantema 1984:1044 変更)

☞ 西フリジア語ではかつては te-動詞の数かなり多く, Dijkstra (1900-1911) の辞書には約 80 語が記載されている。また, 20 世紀半ばに刊行された Sipma (1949:68) の文法書では, 接頭辞 te- (旧正書法 to-) は be-/fer-/ûnt- (旧正書法 bi-/for-/ont-~ûnt-) と並んで生産的 ('produktief', ib. 68) であると述べられている。

☞ te- はゴート語の twis-/dis- (ラテン語でも dis-) に対応し, 語源的に数詞の twa 「2」と関係があり, 「2 つに分かれて」を意味した。オランダ語では, 歴史的に中期オランダ語 (Middelnederlands) の時代には te-動詞がかなり多かったが (約 70 語), 17 世紀には大部分消失し, 今日では一部の方言を除いてほとんど残っていない (Tamminga 1973:91,

Van Loey 1970⁸:246))。そのかわり, ver-動詞または stuk 「こわれた, ばらばらになった」を分離成分とする分離動詞が対応することが多い。

フ. tereine~ferreine 「雨で台無しになる」

オ. verregen 「同上」

フ. tegroeie~fergroeie 「曲がって・奇形に成長する」

オ. vergroeien 「同上」

フ. terotsje~ferrotsje 「腐り果てる」

オ. verrotten 「同上」

フ. tebrekke 「砕く」

オ. stuk|breken 「同上」

フ. tebite~ferbite 「かみ砕く」

オ. stuk|bijten 「同上」

フ. teskuorre~ferskuorre 「切り裂く」

オ. stuk|scheuren 「同上」

ただし, どちらにも対応しない語がある。

フ. tebarste 「はじけて飛び散る, ひびが入って割れる」

オ. なし

フ. tesitte~fersitte 「すわることで (... に) しわをつける・いためる」

オ. なし

ドイツ語では, 中高ドイツ語 (Mittelhochdeutsch) 以降, とくに新期ドイツ語 (Neuhochdeutsch) の時代から zer-動詞の数が増大した。zer- は今日でも頻繁に用いる接頭辞である (なお, zer- は接頭辞 za-/zi-と ir-(>er-) の混合に由来するという意見がある (Pfeifer 1993²:1602, Kluge 1995²³:908))。

(3) 接頭辞 ûnt-

接頭辞 ûnt- の意味はほぼ次のようにまとめられる。

(a) 離脱・欠如

接頭辞 ûnt- は第一に, 「... から離れて・なくなって」という「離脱・欠如」(エ. privative) の意味を表わす。そのさい, 以下の統語的な変更を伴う。

① 「ûnt-+能格動詞 (非対格動詞) の自動詞」→他動詞 (非典型的)

能格動詞 (非対格動詞) の自動詞に ûnt- をつけると, 名詞句「... から」を目的語とする他動詞になる。ただし, 主語は動作主ではなく, 変化を被る対象であり, 目的語名詞句「... から」が離脱の意味の前置詞句に相当する点で, 典型的な他動詞とは言えない。完了の助動詞も

ha(wwe)-支配でなく, wêze-支配である。

ûntfalle 「(... から) 脱落する・言葉が漏れる」(falle 「落ちる」)

ûntglûpe 「(... から) 失われる・すべり落ちる」(glûpe 「そっと歩く, 忍び込む」)

ûntkomme 「(... から) のがれる, (物事が人から) 離れる」(komme 「来る」)

ûntreine 「(... が) 雨で (... から) 失われる」(reine 「雨が降る (非人称動詞 it reint)」)

ûntrinne 「(... から) のがれる・避ける・異なる, (物事が人から) 離れる」(rinne 「歩く, 走る」)

ûntsnappe 「(... から) 逃亡する・免れる」(snappe 「つかまえる」)

ûntstjerre 「(... を置き去りにして) 死ぬ」(stjerre 「死ぬ」)

ûntwaaie 「(... が) 風で (... から) 失われる」(waaie 「(風が) 吹く, 風が吹く (非人称動詞 it waait)」)

It wurd *ûntfoel* my. 「私は口をすべらせてしまった (=思わず私の口から言葉が漏れてしまった)」(ûntfalle) (Dykstra 2000 : 769)

Och hearken, dat is my *ûntkommen*. 「あら, それは忘れていたわ (=それは私の念頭から離れた)」(ûntkomme) (Bangma 1993² : 86)

De lieder is ús *ûntstoarn*. 「指導者は私たちを残して (=私たちから離れて) 他界してしまった」(ûntstjerre) (Dykstra 2000 : 773 変更)

It kin my *ûntreine* noch *ûntwaaie*. 「雨が降ろうか風が吹こうか, 私はそれは平気だ (=私からそれ (=定収入) はなくなる)」(ûntreine, ûntwaaie) (Zanema 1984 : 1123)

目的語「... から」が表現されないこともある。この点でも, この ûnt-動詞は典型的な他動詞ではない。

De Dútsers hiene him krige, mar hy wist te *ûntkommen*. 「ドイツ人たちは彼を見つけたが, 彼はうまくのがれることができた」(ûntkomme) (Zanema 1984 : 1121)

② 「ûnt-＋他動詞」→他動詞（非典型的）

他動詞に ûnt- をつけて、①と同様に非典型的な他動詞になることもある。

ûntleare 「忘れられる、(物事が人の) 記憶から離れる」(leare 「学ぶ、教える」)

ûntmerke 「(物事が人の) 目にとまらない」(merke 「気づく」)

It ûntleart jin hurd. 「それはすぐに忘れ去られる (=人の記憶から離れる)」(ûntleare) (Sytstra/Hof 1925 : 130)

Dat âlde hânskript wie de lju ûntmurken. 「その古い写本は人々の目にとまらなかった」(ûntmerke) (Zantema 1984 : 1122)

③ 「ûnt-＋他動詞」→二重目的語動詞（典型的な他動詞）

他動詞に ûnt- をつけると、直接目的語名詞句が一つ増えて、二つの目的語を伴う他動詞、つまり、二重目的語動詞(エ. ditransitive)になることがある。つまり、もとの動詞が伴う前置詞句「... から」を ûnt- 動詞が直接目的語名詞句に変えている。これは動作主を主語とする典型的な他動詞である。

ûntkrije 「(... から ... を) 取り返す」(krije 「(... を) 得る」)

ûntnaderije 「(... から ... を) 取り上げる・横領する」(naderje 「(... を) 取り上げる・横領する」)

ûntnimme 「(... から ... を) 取り除く」(nimme 「(... を) 取る」)

ûntstelle 「(... から ... を) 盗む」(stelle 「(... を) 盗む」)

ûnttroaie 「(... から ... を) おだててだまし取る」(troaie 「(... を) だだめる、おだてる」)

Untkrij dat bern it mês! 「あの赤ん坊からナイフを取り上げてちょうだい」(ûntkrije) (Zantema 1984 : 1122)

Jan ûntstiel it my. 「ヨンはそれを私から盗んだ」(ûntstelle) (Tamminga 1973 : 126 変更)

次の語は文語的だが、①②と③の両方の意味で用いる。

ûnttsjen 「①② (... の制御範囲から) 離れる、③ (... から ... を) 取

り去る（文語的）」⇔tsjen「赴く，引く（文語的）」

De krêft is my ûnttein. 「私は力が（＝力が私から）抜けた」(①②)
(Zantema 1984 : 1125)

De sinne hat ús dauwe en mist ûnttein. 「太陽が私たちから露と霧を取り去った」(③) (ib. 1125)

- ④ 「ûnt-＋非能格動詞の自動詞」→二重目的語動詞（典型的な他動詞）
二重目的語動詞は，非能格動詞の自動詞に ûnt- をつけることによって得られる。やはり動作主を主語とする典型的な他動詞である。

ûntkreauwe 「（…から…を）異議を唱えて・争って取る」(kreauwe 「口論する，けんかする」)

ûntprate 「（…から…を）言葉巧みにだまし取る」(prate 「しゃべる」)

ûntstride 「（…にたいして…を）否認・反論する」(stride 「争う，論争する（oer/om…について）」)

ûntwrakselje 「（…から…を）強引に奪い取る」(wrakselje 「格闘する，レスリングをする」)

Hja ûntstried my myn gelyk. 「彼女は私の正しさを否認した（＝私にたいして私の正しさを認めなかった）」(ûntstride) (Dykstra 2000 : 773 変更)

Lit ús der net langer {oer/om} stride. 「もうそれについて言い争うのはやめよう」(stride) (Dykstra 2000 : 680)

目的語が表現されないこともある。

Men kin net ûntstride, dat de ierde om 'e sinne draait. 「地球が太陽のまわりを回っていることに反論することはできない」(ûntstride) (Zantema 1984 : 1124)

- ⑤ 「語幹に名詞を含む ûnt-動詞」→他動詞（典型的）

語幹に名詞を含む ûnt-動詞は，「名詞の物事を…から離す・奪う」という意味になる。「名詞の物事を」の部分は動詞に取り込まれているので，これは「…から」だけを目的語とする他動詞である（「装備動詞」としての be-/fer-動詞を参照。§ 87 (2)(c)③，§ 88 (1)(b)①）。

ûntboskje 「(山林を) 切り開く, (... から) 森林 (bosk) を伐採する」
 ûntfryskje 「非フリジア語化する, (... から) フリジア語 (Frysk) を奪う」

ûnthalzje/ûnthaadzje 「打ち首にする, (... から) 首 (hals 「喉, 首」/ haad 「頭, 首」) をはねる」

ûntkrêftigje/ûntkrêftsje 「無力化する, (... から) 力 (krêft) を奪う」

ûntmoedigje 「落胆させる, (... から) 勇気・士気 (moed) を奪う」

ûntwapenje 「武装解除する, (... から) 武器 (wapen) を取り上げる」

Dat *ûntkrêfte* him. 「それで彼は力が抜けた (=それは彼から力を奪った)」 (ûntkrêftsje) (Sytstra/Hof 1925 : 130)

Wy litte ús net troch tsjinslaggen *ûntmoedigje*. 「我々は逆境でも士気を失わない (=逆境によって勇気を奪わせない)」 (ûntmoedigje) (Dykstra 2000 : 771)

フ. ûnt-(ド. ent-/emp-, オ. ont-) は接頭辞 ant-(ド./オ. ant-, 例. フ. antwurd/ド. Antwort/オ. antwoord 「答え」と歴史的に関係があり, 本来, 「... から離れて」(またはラテン語の ante 「... の前に」に対応する「... に沿って, ... へ」)の意味だったが, 前置詞としては残っていない。ゴート語 (Gotisch) の and, 古ザクセン語 (Altsächsisch) の ant は前置詞として用いる。

フリースラント州東部では ûnt- を ont- と言うが, そのほかに, omt- という異形が見られることがある。古くは omt-動詞が比較的多く存在した。これは n と t の連続を嫌って, 異化が起こった結果と考えられる (Hoekstra 1998 : 148)。ただし, Sytstra/Hof(1925 : 131)と Tamminga(1973 : 126-128) は omt- を om と ûnt- の複合に由来するとみなしている。

(b) 反転・起動・否定

ûnt-動詞のもうひとつの意味には, 反対の動作やもとに戻す動作を示す「反転」(エ. reversative) と, 動作の開始を示す「起動」(エ. inchoative) がある。両者は本来, 西フリジア語に固有ではなく, オランダ語の影響による。

① 反転

ûntbine 「(結んだものを) ほどく」(bine 「結ぶ」)

ûntdekke 「発見する, (... から) 覆いを取り除く」(dekke 「覆う, か

ぶせる」)

ûntkenne 「否定する」(kenne 「知っている」)

ûntklaaie 「服を脱がせる」(klaaie 「服を着せる」, jin ûntklaaie 「服を脱ぐ」のように再帰的にも用いる)

ûntsmette 「消毒・殺菌する」(smette 「汚す, しみをつける」)

ûntspanne 「ゆるめる, リラックスさせる」(spanne 「張る, 緊張させる」)

ûntwine 「(巻いたものを) ほどく」(wine 「巻く, 巻きつける」)

Untklaai dy net earst op bêd giest. 「ベッドに入る前に服は脱ぐな(=死ぬ前に財産は分け与えるな。ことわざ)」(jin ûntklaaie)
(Beintema 1990: 137)

次の語では前置詞 oan (オ. aan/ド. an) に注意。

ûntliene 「(単語などを) 借用する (oan ... から)」(liene 「貸す, 借りる」)

In soad wurden *binne ûntliend* oan 'e bibel. 「多数の語が聖書から取り入れられた」(ûntliene 受動態現在完了形) (Dykstra 2000: 771)

- ☞ フ. in wurd oan it Frânsk ûntliene 「単語をフランス語から借用する」
- オ. een woord aan het Frans ontlenen 「同上」
- ド. ein Wort [aus] dem Französischen entlehnen 「同上」

次の語は「反転」の意味に準じて理解できるが、「離脱・欠如」の意味に解釈することも可能である。

ûntdwaan 「(... から) 取り去る・はぎ取る (fan ... を)」(dwaan 「入れる」)

De suster *ûntdie* him fan 'e klean. 「看護婦は彼の服をぬがせた」
(Dykstra 2000: 769)

② 起動

ûntbaarne 「発火する」(baarne 「燃える」)

ûntflamje 「(火・感情が) 燃え上がる」(flamje 「炎を上げて燃える」)

ûntstean 「発生する, 現われる」(stean 「立っている, ... の状態である」)

起動の意味を強めるほかに、統語的な変更が生じる語もある。

ûntteie 「(氷・雪が) とける, (冷凍食品が) 解凍する; (冷凍食品などを) 解凍する, (冷蔵庫を) 霜取りする」(teie 「氷・雪がとける (非人称動詞 it teit)」)

- ☞ 歴史的には、起動の意味の ûnt- (オ. ont-/ド. ent-) は起動の意味の別の接頭辞 in- (ゴート語 (Gotisch ゴ), 古高ドイツ語 (Althochdeustch)) を駆逐した結果による (Van Loey 1970⁸: 246, De Vries/Tollenaere 1971: 486)。

フ. ûntbaarne 「発火する」/ûntstean 「発生する, 現われる」(ûnt-)

オ. ontbranden 「同上」/ontstaan 「同上」(ont-)

ド. entbrennen 「同上」/entstehen 「同上」(ent-)

ゴ. inbrannjan 「同上」/instandan 「同上」(in-)

③ 否定

ûnt-動詞が「否定」の意味の接頭辞 ûn- に名詞・形容詞を添えた動詞に由来するか, ûn- との混交によって生じたと考えられる語がある (Hoekstra 1993 a: 12 f.)。

ûntreinigje 「汚す, けがす」(ûnrein 「不潔な」<rein 「清潔な」)

ûntrêstigje 「不安にする, 動揺させる」(ûnrêst 「不安, 動揺」<rêst 「平安, 休息」)

ûnthilligje 「神聖さをけがす, 冒とくする」(ûnhillich 「神聖でない」<hillich 「神聖な」)

ûntskuldigje/ferûntskuldigje 「許す」(ûnskuld 「無実」<skuld 「罪, 責任」)

- ☞ オランダ語では, 上記のように否定の意味の on- と関係がある ont-動詞は, さらに ver- を伴って, ver-ont-動詞となる (Van Loey 1970⁸: 246)。ドイツ語では be-un-, ver-un-となる。

フ. ûntreinigje 「汚す, けがす」(ûnrein 「不潔な」<rein 「清潔な」)

オ. verontreinigen 「同上」(onrein 「同上」<rein 「同上」)

verontrusten 「同上」(onrust 「同上」<rust 「同上」)

ド. beunruhigen 「同上」(Unruhe 「同上」<Ruhe 「同上」)

verunreinigen 「同上」(unrein 「同上」<rein 「同上」)

ただし、次の語についてはドイツ語では *ent-* が対応する。オランダ語でも *ver-* の付加が任意の語が含まれる。西フリジア語でも *fer-ûn-* 動詞となるものが含まれる。

フ. *ûnthilligje* 「神聖さをけがす、冒とくする」 (*ûnhillich* 「神聖でない」 < *hillich* 「神聖な」)

ûntskuldigje/ferûntskuldigje 「許す」 (*ûnskuld* 「無実」 < *skuld* 「罪、責任」)

オ. *verontheiligen/ontheiligen* 「同上」 (*onheilig* 「同上」 < *heilig* 「同上」)
verontschuldigen 「同上」 (*onschuld* 「同上」 < *schuld* 「同上」)

ド. *entheiligen* 「同上」
entschuldigen 「同上」

なお、次の *fer-* 動詞は西フ. *ûn-* 名詞/オ. *on-* 名詞/ド. *un-* 名詞を含んでいる。

フ. *ferûngelokje* 「事故・災難にあう」 (*ûngelok* 「事故、災難」)

オ. *verongelukken* 「同上」 (*ongeluk* 「同上」)

ド. *verunglücken* 「同上」 (*Unglück* 「同上」)

(c) その他

ûnt- のない動詞との意味的な対応が比較的不明確な語がある。

ûntbrekke 「不足している」 (*brekke* 「割る、割れる」)

ûntfange 「受け取る、迎える」 (*fange* 「つかまえる、とらえる」)

jin ûntjaan 「発達・発展する、(…の氷・雪が) とけて柔らかくなる」 (*jaan* 「与える」)

ûntlitte 「(…の氷・雪が) とけて柔らかくなる」 (*litte* 「やめる、放っておく、…させる」)

ûntstekke 「点火する、(感情を) 燃え立たせる；火がつく、(感情が) 燃え立つ」 (*stekke* 「刺す、突く」)

It ûntbrekt ús oan neat. 「私たちには何も不足はない」 (*ûntbrekke*)
(Dykstra 2000 : 768)

Der ûntbrekt jild. 「金が足りない」 (*ûntbrekke*) (ib. 768)

☞ *ûntbrekke* は歴史的に「割れて離れる」→「その場からなくなる」→「不足する」という意味的な発達を経た。*ûntfange* は「…から離れてつかまえる」に由来するとも解釈できる。

(4) 接頭辞 mis-

「不正・不適切・否定」の意味を表わす接頭辞 mis- は、今日では非生産的である。

(a) 分離動詞の分離成分 mis と非分離動詞の接頭辞 mis-

mis- は非分離動詞の接頭辞のほかに、そのままの語形で分離動詞の分離成分としても用いる（以下、両者を区別するために、語例ではアクセントの位置を「ˈ」で示す）。

i) 分離動詞の分離成分 mis

ˈmis|rekkenje 「計算違いをする」→ hy rekkent (...) mis 「彼は計算違いをする」

ii) 非分離動詞の接頭辞 mis-

misˈbrûke 「乱用する，悪用する」→ hy misbrûkt 「彼は乱用・悪用する」

misˈhaagje 「(...) の気に入らない」→ it mishaget him 「それは彼の気に入らない」

両者の使い分けは微妙だが，おおまかに言って，次の傾向がある。分離動詞の分離成分 mis は，目標に到達できずに不完全に終わる「失敗・誤り」の意味を表わすのにたいして，非分離動詞の接頭辞 mis- は，「不正・不適切」に行なわれる動作を表わす。たとえば，分離動詞の分離成分 mis の例として，ˈmis|rekkenje 「計算違いをする」，ˈmis|slaan 「打ち損じる」は，「うまく計算 (rekkenje) できない」「うまく打て (slaan) ない」という意味である。一方，非分離動詞の接頭辞の mis- の例として，misˈbrûke 「乱用する，悪用する」，misˈliede 「間違った方向に導く，だます」は，「不正・不当に使う (brûke)」「不正・不適切に導く (liede)」という意味であり，「うまく使えない」「うまく導けない」という意味ではない。

換言すれば，前者は分離成分 mis と結びつく動詞が表わす動作とは独立に，その動作の「結果」を示すのにたいして（「... するが（動詞）」「そうはならない (mis)」），後者は「接頭辞 mis- 動詞」全体としての「様態」を示す（「〈否定的な (mis-) 動作(動詞)を〉する」）。これは，mis(-) の意味が動詞

との形態的な結びつきのレベルに応じて、意味的な結びつきの相違として現われているためと考えられる。つまり、前者は動詞との結びつきが弱く、後者は強い。

ただし、動詞の意味に動作主が想定できない場合には、非分離動詞の接頭辞 *mis-* は「失敗・誤り」という分離動詞の分離成分 *mis* の意味に近づく。これは「悪く...する」という *mis-* の「不正・不適切」の意味が、動作主が想定できないために、動詞の意味とは反対の「...しない」という「否定」の意味に転じるためと考えられる（ちなみに、日本語でも「よくわかる」の否定は「悪くわかる」ではなく、「わからない」である）。たとえば、非分離動詞の接頭辞の *mis-* は、*mis'haagje*「(...に) 気に入らない」では、「(...に) 悪く気に入る」から「(...に) 気に入らない」という意味に転じ、*haagje*「(...に) 気に入る」とは反対の「否定」の意味を表わすことになる。

① 分離動詞の分離成分 *mis*：「失敗・誤り」

ˈmis|fetsje「誤解する」(fetsje「理解する、つかむ」)

ˈmis|gean/ˈmis|rinne「道を間違える、失敗する」(gean「行く」/rinne「歩く」)

ˈmis|rekkenje「計算違いをする」(rekkenje「計算する」)

ˈmis|slaan「打ち損じる」(slaan「打つ」)

ˈmis|stappe「踏みはずす、つまづく」(stappe「歩む、足を踏み出す」)

ˈmis|taaste「つかみそこなう、間違ったものをつかむ」(taaste「手探りで探す、さわって確かめる」)

Aste sa oanhâldste, dan *giet* it *mis* mei dy.「あくまでそうしようとするなら、おまえにとってはまずいことになるよ」(ˈmis|gean) (WFT 13/1996：289 正書法変更)

Hy *slacht* de bal *mis*.「彼はボールを打ちそこねる(＝不適切な態度を取る)」(ˈmis|slaan) (WFT 13/1996：297 変更)

② 非分離動詞の接頭辞 *mis-*：「不正・不適切」

mis'brûke「乱用する、悪用する」(*brûke*「使う」)

jin mis'hâlde/*jin mis'drage*「無礼な態度を取る」(*jin hâlde en drage*

「態度を取る」)

mis`driuwe/mis`dwaan「罪を犯す, 悪いことをする」(driuwe/dwaan
「推し進める (など)」)

mis`foarmje「ゆがめる, 変形する」(foarmje「形作る, 形成する」)

mis`gunne「ねたむ, 認めようとしなない, 分け与えない」(gunne「ね
たまない, 認める, 分け与える」)

mis`liede「間違った方向に導く, だます」(liede「導く」)

mis`priizgje「非難する, 反対する, 責める」(priizgje「ほめる」)

mis`sizze「失言する, 侮辱する」(sizze「言う」)

Ik *missis* der dochts neat mei? 「私はそれで何も失礼なことを言っ
ていないでしょう」(mis`sizze) (WFT 13/1996: 296 正書法変更)

Hja *mishâldt* har net. 「彼女は無礼な態度は取っていない」(mis-
`hâlde) (ib. 290 変更)

③ 非分離動詞の接頭辞 mis-: 「否定」

mis`haagje「(... に) 気に入らない」(haagje「(... に) 気に入る」)

mis`lokke「失敗する」(lokke「成功する」)

mis`stean「不適切である, 似合わない」(stean「似合っている」)

Dy âlde hoed *missiet* by har knappe klean. 「あの古帽子は彼女のき
れいな服には似合わない」(mis`stean) (Zantema 1984: 620 変更)

Syn wurden *mishagen* har. 「彼の言葉は彼女には気に入らなかった」
(mis`haagje) (Hoekstra 1998: 150 変更)

次の語の主語は認識の主体として動作主の意味が弱いと考えられる。

mis`kenne「見誤る, 見そこなう」(kenne「知っている」)

(b) 同一の語に両方の mis(-) が付加される場合

同一の動詞に分離動詞の分離成分 mis と非分離動詞の接頭辞 mis- が付加
されることがある。意味の違いは上記の説明に準じて理解できる。

`mis|gean「失敗する, それる」(失敗・誤り) ⇔ jin mis`gean「無礼
な態度を取る」(不正・不適切) (gean「行く, 進む」)

`mis|gripe「失敗する, つかみそこなう」(失敗・誤り) ⇔ jin mis`gripe

「不正に手を出す，あやまちを犯す」(不正・不適切) (gripe「つかむ」)
 Hy woe him oan de tafel beethâlde, mar *griep mis* en foel. 「彼は
 テーブルにつかまろうとしたが，つかみそこねて転倒した」(‘mis-
 |gripe) (WFT 13/1996: 289 正書法変更)

Hy *hat him* oan dy faam *misgrypt*. 「彼はその女の子に手を出した」
 (jin mis‘gripe) (WFT 13/1996: 289 正書法変更)

次の語は一方が別の接頭辞 be- を除いて mis- をつけた例である ((c)
 ③)。

‘mis|falle「失敗する，期待に背く」(失敗・誤り) (falle「落ちる，(...
 の)状態になる」) ⇔ mis‘falle「(... に)気に入らない」(否定) (befalle
 「(... に) 気に入る」)

☞ WFT 13/1996 には次の語も記載されている。両者の区別は上記の説明に準
 じて理解できる (ただし，Zantema 1984 と Dykstra 2000 には分離動詞の
 分離成分 mis としてのみ記載されている)。

‘mis|gean「失敗する，それる」(失敗・誤り) ⇔ mis‘gean「逃れる」(否定)
 (ib. 289) (gean「行く，進む」)

‘mis|hearre「間違って聞く・聞いて理解する」(失敗・誤り) ⇔ mis‘hearre
 「聞いた感じが悪い，調子はずれに聞こえる」(不正・不適切) (ib. 290)
 (hearre「聞く，聞こえる」)

‘mis|riede「良い忠告を与えることに失敗する」(失敗・誤り) ⇔ mis‘riede
 「間違っただ忠告を与える」(ib. 294) (riede「忠告する」)

☞ 接頭辞 fer- をつけて，接頭辞 mis- に少なくとも部分的に類似した意味を
 表わす語もある ((1)(b)⑦)。

mis‘gunne「ねたむ，認めない，分け与えない」～fer‘gunne「同左」

mis‘liede「間違っただ方向に導く，だます」～fer‘liede「間違っただ方向に導
 く，誘惑する」

mis‘riede「良い忠告を与えることに失敗する，言い当てそこねる」～fer-
 ‘riede「良い忠告を与えることに失敗する，裏切る，密告する」

☞ 次の語は接頭辞 mis- と並んで，オランダ語と同様に，アクセントをもつ非
 分離動詞の接頭辞 wan- をつけて否定の意味を表わす珍しい例である。

フ. mis‘trouwe～wantrouwe「不信を抱く，信用しない」

オ. mis‘trouwen～wantrouwen「同上」

(c) mis(-) と他の接頭辞

西フリジア語では2種類の無アクセントの接頭辞は共起しない。すでに接頭辞を伴った動詞に mis(-) をつける場合には、次のようになる。

① 接頭辞の保持と分離成分 mis の付加：「失敗・誤り」

もとの動詞の接頭辞はそのまま保ちながら、分離成分 mis をつけて分離動詞を形成する。これは「失敗・誤り」の意味を表わす場合である。

ˈmis|beslaan「失敗する」(beˈslaan「(良い) 結果になる, かぶせる, 覆いをつける」)

ˈmis|beteare「失敗する」(beˈteare「(良い) 結果になる, 包む, たたむ」)

ˈmis|ferstean/ˈmis|begripe「誤解する」(ferˈstean/beˈgripe「理解する」)

It {besloech/betearde} mis.「それは悪い結果になった」(ˈmis|beslaan/ˈmis|beteare) (Dykstra 2000: 411)

② 接頭辞 mis- との交替：「不正・不適切」

もとの動詞の接頭辞を除いて、接頭辞 mis- をつける。これは「不正・不適切」の意味を表わす場合である。

misˈhannelje「虐待する, 乱暴に扱う」(beˈhannelje「扱う」)

Hja soarge dat nije oankommelingen net *mishannele waarden*.「彼女は新参者たちが悪い扱いを受けないように気を配った」(misˈhannelje) (WFT 13/1996: 290 変更)

③ 接頭辞 mis- との交替：「否定」

②と同様に、もとの動詞の接頭辞を除いて、接頭辞 mis- をつける。これは「否定」の意味を表わす場合である。

misˈfalle「(...) に 気に入らない」(beˈfalle「(...) に 気に入る」)

misˈkomme「(食べ物) が 体に合わない, 都合が悪い」(beˈkomme「(食べ物) が 体に合う, 回復する, 静まる, 得る」)

misˈtrouwe「不信を抱く, 信用しない」(beˈtrouwe/ferˈtrouwe「信用する, 委託する」)

Der *miskomt* him neat. 「彼の口に合わないものは何もない」 (mis-
‘komme) (WFT 13/1996 : 291)

☞ オランダ語とドイツ語でも、他の接頭辞動詞にはアクセントをもつ分離成分 (オ. mis/ド. miss (旧正書法 miß)) を付加することができる (‘はアクセントの位置)。

フ. ‘mis|ferstaan 「誤解する」 (fer‘staan 「理解する」)

オ. ‘mis|verstaan 「同上」 (ver‘staan 「同上」)

ド. ‘miss|verstehen 「同上」 (ver‘stehen 「同上」)

ただし、ドイツ語ではアクセントをもつ miss は、不定形 (過去分詞、不定詞) では ge- や zu を動詞との間にはさむか否かに揺れがあり、形態的な性格が不明確である。また、ドイツ語では、miss-動詞のアクセントの位置が一定しないことが多い。意味的区別も不明確である。

フ. mis‘brûke 「乱用する、悪用する」

mis‘hannelje 「虐待する、乱暴に扱う」

オ. mis‘bruiken 「同上」

mis‘handelen 「同上」

ド. miss‘brauchen ~ ‘miss|brauchen 「同上」

miss‘handeln ~ ‘miss|handeln 「同上」

☞ 西フリジア語・オランダ語とドイツ語の間で、非分離動詞の接頭辞が分離動詞の分離成分かが異なる場合がある。次の語は意味的に等しい。

フ. mis‘haagje 「(…に) 気に入らない」

オ. mis‘hagen 「同上」

ド. ‘mis|behagen 「同上」

次の語は意味的にも異なり、もとの動詞も異なる。

フ. ‘mis|riede 「言い当てそこねる、良い忠告を与えることに失敗する」
(riede 「言い当てる、忠告する」)

オ. ‘mis|raden 「同上」 (raden 「同上」)

ド. mis‘raten 「失敗する、できそこないになる」 (ge‘raten 「(…の状態に) 至る・陥る」)

なお、西フリジア語には ge- がないので、ge- を mis- と交替させる必要はない。

フ. mis‘lokke 「失敗する」 (lokke 「成功する」)

オ. mis‘lukken 「同上」 ((ge-) ‘lukken 「同上」)

ド. miss‘lingen 「同上」 (ge‘lingen 「同上」)

☞ 上例からもわかるように、ドイツ語とオランダ語でも接頭辞 mis-/miss- は他の接頭辞と共起できない。ただし、接頭辞 ge- は、オランダ語では歯音 n/l で始まる動詞で他の接頭辞と共起する。ドイツ語では ge+n/l →

gn/gl という変化が起きて、接頭辞の境界があいまいになっている。

フ. fer¹lykje 「比較する」/fer¹noege 「満足した」

オ. ver¹ge¹liĳken 「同上」/ver¹ge¹noegd 「同上」

ド. ver¹gleichen (<ver¹g(e)¹leichen) 「同上」/ver¹g¹nügd (<ver¹g(e)¹nügd) 「同上」

西フリジア語でも、オランダ語から借用した ge-動詞では同様に他の接頭辞も共起する。

フ. be¹ge¹liede 「同伴する、伴奏する」/be¹ge¹nadigje 「恩赦を与える」

オ. be¹ge¹leiden 「同上」/be¹ge¹nadigen 「同上」

ド. be¹gleiten (<be¹g(e)¹leiten) 「同上」/be¹gnadigen (<be¹g(e)¹nadigen) 「同上」

☞ mis-/miss-名詞では、フ. -ing/オ. -ing/ド. -ung による派生名詞を除いて、3言語とも mis-/miss- にアクセントが移る。

フ. ¹misbrûk 「乱用、悪用」⇔mis¹hanneling 「虐待」

オ. ¹misbruik 「同上」⇔mis¹handeling 「同上」

ド. ¹Missbrauch 「同上」⇔Miss¹handlung⇔¹Misshandlung 「同上」

(d) 他の接頭辞の代用

少数の語で mis- を接頭辞 be-/fer- の代用に使うことがある。この場合、be-/fer-動詞は mis-動詞と意味的に等しい。この mis- は意味的に異質であり、もともと否定的な意味をもつ be-/fer-動詞に引きずられるようにして用いたと考えられる例外的な用法である (Hoekstra 1993a : 14)。

mis¹ledigje 「侮辱する」〜be¹ledigje 「同左」

mis¹tribelje 「失敗する、台無しにする」〜fer¹tribelje 「同左」

Hy *hat ús raar misledigje*.「彼は私たちをひどく侮辱した」(mis¹ledigje)
(WFT 13/1996 : 292 変更)

次の語は、最初の無アクセント音節が接頭辞ではないにもかかわらず、mis-と入れ替わった珍しい例である。

mis¹kearje〜man¹kearje 「不足する」

mis¹learje〜fe¹learje 「失敗する」(フランス語 *faillir*)

Har plantsje *mislearre*.「彼女の計画は失敗した」(mis¹learje) (Dykstra 2000 : 412 変更)

(e) もっぱら過去分詞として用いる mis-動詞

以下の語はもっぱら過去分詞として用いる（アクセントは mis- にはない）。

mis´hipt/mis´makke/mis´woeksen 「奇形の、形の悪い」

mis´noege 「不快な」、mis´pleatst 「場違いの」

(5) 接頭辞 wjer-

(a) wjer- の意味

wjer- は「対抗、反射・反響」の意味をもち、動作や自然現象が逆方向にはたらくことを表わす非生産的な接頭辞である（以下、後述の2種類のwjer-を区別するために、語例ではアクセントの位置を「´」で示す）。

① 対抗

wjer´farre 「(人の身の上に) 起こる・降りかかる」(farre 「船で行く、... という定めになる」)

wjer´hâlde 「引き留める」(hâlde 「保つ」)

wjer´lizze 「反論する」(lizze 「置く、提示する」)

wjer´sprekke 「矛盾する、否認する」(sprekke 「発言する」)

wjer´stean 「抵抗する」(stean 「立っている、(... の状態) である」)
Sokke ferliedingen kin hast nimmen *wjerstean*. 「そのような誘惑にはほとんどだれも抵抗できない」(wjer´stean) (Tamminga 1963 : 93 変更)

De advokaat *wjerleit* de beskuldigingen ien foar ien. 「弁護士は起訴項目にひとつつつ反論する」(wjer´lizze) (ib. 93 変更)

Lit jimme dochs net *wjerhâlde* om eigen sin te dwaan. 「自分のやりたいことに横槍を入れさせないようにしなさい」(wjer´hâlde) (ib. 93 変更)

② 反射・反響

wjer´galmje 「反響する」(galmje 「叫ぶ、反響する」)

wjer´keatse 「反響する、反射する」(keatse 「反響する、反射する」)

wjer´klinke 「反響する, 鳴り響く」 (klinke 「鳴る」)

wjer´spiegelje 「反射する」 (spiegelje 「反射する, 映す」)

Syn lûd *wjerklonk* troch de hoare simmerjûn. 「彼の声はにぎやかな夏の夜にこだました」 (wjier´klinke) (ib. 93 変更)

It sinneljocht *wjerspegele* yn it wetter. 「太陽の光が水面に反射していた」 (wjer´spiegelje) (ib. 93 変更)

It feestgerûs *wjergalmet* troch de bosken. 「祭りの喧噪は森の中に響きわたる」 (wjer´galmje) (ib. 93 変更)

De ûndergeande sinne *wjerkeatste* yn 'e kouwefinsters fan 'e pleats. 「沈み行く太陽が農場の牛小屋の窓に照り映えていた」 (wjer´keatste) (ib. 93 変更)

接頭辞 wjer- はドイツ語の接頭辞 wider-, これと語源的に関係のある分離成分 wer- 「再び」はドイツ語の分離成分 wieder- に対応する。歴史的には, wjer- は wer- が「割れ」(brekking) を起こした語形である。

(b) その他

次の2語はアクセントが wjer- の部分にある点で例外的である。しかも, 両者は非分離動詞であり, wjer- は分離成分ではなく, 接頭辞である。

´wjerakselje 「あがく, いやがる」 (akselje 「あがく, いやがる」)

´wjerkôgje 「反芻(すう)する」 (kauwen 「噛む」)

´wjerljochtsje 「稲妻が光る」

De kij lizze te *wjerkôgjen*. 「子牛たちは寝そべって草を反芻している」 (Zantema 1984 : 1199)

´wjerkôgje 「反芻する」の wjer- は「再び」という意味であり, 本来, wer-|kôgje という分離動詞の語形が予測される。事実, 方言的な語形としてこの分離動詞の語形が見られる。これは類推によって wer- が wjer- として定着した変則的な語形と考えられる (Tamminga 1963 : 93)。なお, オランダ語では her´kauwen である。

一方, ´wjerljochtsje 「稲妻が光る」は名詞 ´wjerljocht 「稲妻」から品詞転換によって派生した動詞である。この wjer- は waar 「天気」の異形であり,

名詞 *ˈwaarljocht*, 動詞 *ˈwaarljochtsje* という語形もある。

☞ この点ではオランダ語とドイツ語も同様である。

フ. *ˈwjerljochtsje* 「稲妻が光る」 ～ *ˈwjerljocht* 「稲妻」

オ. *ˈweerlichten* 「同上」 ～ *ˈweerlicht* 「同上」

ド. *ˈwetterleuchten* 「同上」 ～ *ˈWetterleuchten* 「同上」

(6) 接頭辞 *efter-/foar-/oan-/oer-/om-/troch-/ûnder-*

前置詞と同形で、分離動詞の分離成分としてもはたらく小辞（不変化詞）と語形的に共通する次の接頭辞をもつ非分離動詞がある。

efter-/foar-/oan-/oer-/om-/troch-/ûnder-

この種の動詞は西フリジア語では非生産的であり、ほとんどがオランダ語からの翻訳借用 (*de lienoersetting*, エ. *loan translation*) である (Hoekstra 1998: 150)。以下、オランダ語との比較を交えて説明する（「ˈ」はアクセントの位置）。

(a) *efter-/foar-/oan-/troch-*動詞

とくに *efter-/foar-/oan-/troch-*動詞は数が少ない。以下の語がおもなものである。

① *efter-*動詞

efterˈfolgje 「(…を) 追跡する」 (*folgje* 「追う」, オ. *achterˈvolgen*)

efterˈhelje 「(…に) 追いつく, 取り戻す」 (*helje* 「取ってくる」, オ. *achterˈhalen*)

It tinkbyld dat er it ferkeard dien hat, efterfolget him. 「彼がそれを間違ってやったという見方が彼につきまといっている」 (*efterˈfolgje*)
(WFT 4/1987: 299 変更)

② *foar-*動詞

foarˈsjen 「見越す, 予測する, (…に) 供給する (*fan* …を), 満たす (*yn* …を)」 (*sjen* 「見る, わかる」, オ. *voorˈzien*)

foarˈsizze 「予言する, 予告する」 (*sizze* 「言う」, オ. *voorˈzeggen*)
⇔ *ˈfoar|sizze* 「(答えなどを) 小声で先に言って教える, (後で繰り返

させるために模範として)先に言う」(sizze「同上」, オ. ´voor|zeggen)
 Dat wie net te *foarsjen*. 「それは予測できなかった」(foar´sjen)
 (Dykstra 2000:180 変更)

③ oan-動詞

oan´furdigje/oan´furdzje 「受け入れる, 応じる」(furdigje/furdzje
 「用意する, 派遣する」, オ. aan´vaarden)

④ troch-動詞

troch´dolgje 「短刀で刺し通す」(dolgje 「短刀で刺す」, オ. door´ste-
 ken)

troch´grûnje 「見抜く, 見通す」(grûnje 「(... の) 基礎を築く・深さ
 を測る」, オ. door´gronden)

Dy frou is net gau te *trochgrûnjen*. 「あの女性はすぐに正体を見抜く
 ことができない」(Zantema 1984:1078 変更)

(b) oer-/om-/ûnder-動詞

oer-/om-/ûnder-動詞には比較的多数の語が含まれる。

① oer-動詞

oer´falle 「襲う, 不意打ちする」(falle 「落ちる, (... の状態に) なる」,
 オ. over´vallen)

oer´hearskje 「支配・圧倒する, 支配的・圧倒的である」(hearskje 「支
 配する, 盛んである」, オ. over´heersen)

jîn oer´ite 「食べすぎて体をこわす」(ite 「食べる」, オ. zich over´eten)

oer´libje 「生き残る」(libje 「生きる」, オ. over´leven)

oer´skatte 「過大評価する」(skatte 「評価する」, オ. over´schatten)

oer´treffe 「凌駕する, 勝る」(treffe 「当てる, 感動させる」, オ. over-
 ´treffen)

oer´tsjûgje 「納得させる」(tsjûgje 「証言する, 証明する」, オ. over-
 ´tuigen)

oer´winterje 「冬を越す, 冬眠する」(winterje 「冬になる (非人称動
 詞 it wintert)」, オ. over´winteren)

分離動詞の分離成分としても用いる語がある。

oerˊlade「荷物を積すぎる, 負担をかける」(lade「荷物を積む」, オ.
overˊladen)

⇨ˊoer|lade「(乗客・荷物を) 別の船・列車に積みかえる, (荷物を)
再び積む」(lade「同上」, オ. ˊover|laden)

oerˊride「(車が...を) ひく」(ride「(車で) 行く」, オ. overˊrijden)

⇨ˊoer|ride「(...の上を) 車で渡る」(ride「同上」, オ. ˊover|rijden)

oerˊwinne「(敵・困難に) 勝つ, 征服する」(winne「勝つ, 優勝する」,
オ. overˊwinnen)

⇨ˊoer|winne「同上」(winne「勝つ, 優勝する」, オ. ˊover|winnen)

jīn oerˊwurkje「過労で体をこわす」(wurkje「働く」, オ. zich overˊwerken)

⇨ˊoer|wurkje「残業する」(wurkje「同上」, オ. ˊover|werken)

Underweis sjogge se nei de moaie natuer fan 'e hjerst. De brune
kleur *oerhearsket*.「途中で彼らは美しい秋の自然を眺める。あたりは
すっかり紅葉している (=褐色が支配的である)」(oerˊhearskje)
(ULI'S, A 4 : 11 変更)

Sy besykje ús derfan te *oertsjûgjen* dat we sûnder dit gemak net
libje kinne.「彼らは私たちがこの便利さなしには生きていけないとい
うことを私たちに納得させる」(oerˊtsjûgje) (ULI'S, A 12 : 7)

② om-動詞

omˊearmje「抱きしめる, 快諾する」(earm「腕」, オ. omˊarmen)

omˊfetsje「取り囲む, 含む」(fetsje「とらえる, 理解する」, オ. omˊvatten)

omˊfiemje「腕を回す, 含む」(fiemje「腕を伸ばして長さを測る」, オ.
omˊvademen)

omˊklamme「握りしめる, 抱きしめる」(klamme「はさむ, 締めつけ
る」, オ. omˊklemmen)

omˊsirkelje「丸で・丸く囲む, (...の) まわりを回る」(sirkelje「回

転する」, オ. *om`cirkelen*)

om`skriuwe* 「定義する, 言い換える, 特定する」 (*skriuwe* 「書く」, オ. *om`schrijven)

om`slute* 「取り囲む, 包み込む」 (*slute* 「閉める」, オ. *om`sluiten)
分離動詞の分離成分としても用いる語がある。

om`jaan* 「取り囲む」 (*jaan* 「与える」, オ. *om`geven)

⇔ *om|jaan* 「配る, 周囲に手渡す」 (*jaan* 「同上」, オ. *om|geven*)

Har wurkterrein *omfiemet* hiele Europa. 「彼女の活動領域 (= 専門領域) はヨーロッパ全体に及んでいる」 (*om`fiemje*) (Dykstra 2000 : 482 変更)

De jonge *omklamme* de beam. 「子供は木にしがみついた」 (*om`klamme*) (Eisma 1989 : 25 変更)

③ *ûnder*-動詞

ûnder`brekke* 「中断する, 妨げる」 (*brekke* 「割る, 割れる」, オ. *onder`breken)

ûnder`drukke* 「抑圧する, 鎮圧する」 (*drukke* 「圧迫する, 押さえる」, オ. *onder`drukken)

ûnder`fine* 「経験する, (不慮の事態に) 遭遇する」 (*fine* 「見つける」, オ. *onder`vinden)

ûnder`hâlde* 「維持する, もてなす, 説教する」 (*hâlde* 「保つ」, オ. *onder`houden)

ûnder`sykje* 「調査・検査・研究する」 (*sykje* 「探す」, オ. *onder`zoeken)

ûnder`skatte* 「過小評価する」 (*skatte* 「評価する」, オ. *onder`schatten)

ûnder`skiede* 「区別・識別する, (勲章などを) 授与する」 (*skiede* 「分離させる, 分離する」, オ. *onder`scheiden)

ûnder`streekje* 「下線を引く, 強調する」 (*streekje* 「線を引く」, オ. *onder`strepen)

ûnder`wize* 「教える, 指導する」 (*wize* 「示す」, オ. *onder`wijzen)
分離動詞の分離成分としても用いる語がある。

ûnderˈgean「被る, 受ける」(gean「行く, (...という)状態である」,
オ. onderˈgaan)

⇔ûnder|gean「沈む, 滅びる」(gean「同上」, オ. ˈonder|gaan)

De foarsitter ûnderbruts him.「議長は彼の発言をさえぎった」(ûnder-
ˈbrekke) (Dykstra 2000: 756 変更)

Dy twillingen binne hast net faninoar te ûnderskieden.「あの双子は
ほとんど区別がつかない」(ûnderˈskiede) (Zantema 1984: 1109)

(c) オランダ語との相違

オランダ語では分離動詞の分離成分である小辞（不変化詞）と非分離動詞の接頭辞に分かれて、別の意味の2語であるのにたいして、西フリジア語ではともに分離動詞の分離成分である小辞（不変化詞）として1語になっている場合がある。これは上述のように、西フリジア語では非分離動詞の接頭辞に強い制限があるためである (Hoekstra 1991: 98-100, Eisma 1989: 25, Sytstra/Hof 1925: 132)。

i) フ. ˈfoar|komme「前に出る, 生じる, (...のように)思われる; 予防する, 先手を打つ」

オ. ˈvoor|komen「前に出る, 生じる, (...のように) 思われる」

⇔voorˈkomen「予防する, 先手を打つ」

ii) フ. ˈoer|lizze「提出する; 熟考する」

オ. ˈover|leggen「提出する」

⇔overˈleggen「熟考する」

iii) フ. ˈoer|komme「やって来る, 訪問する, あふれる, 腐る; (人に) 起こる・降りかかる」

オ. ˈover|komen「やって来る, 訪問する, あふれる, 腐る」

⇔overˈkomen「(人に) 起こる・降りかかる」

iv) フ. ˈtroch|brekke「二つに割る・割れる, (太陽が雲間から) 現われる; 突破する, (慣習・法律などを) 破る」

オ. ˈdoor|breken「二つに割る・割れる, (太陽が雲間から) 現われる」

⇔doorˈbreken「突破する, (慣習・法律などを) 破る」

- v) フ. 'troch|sjen 「目を通す, 調べる; 見抜く, 見破る」
 オ. 'door|zien 「目を通す, 調べる」
 ⇔ door'zien 「見抜く, 見破る」
- フ. Ik besocht dat *foar* te *kommen*. 「私はそれを予防しようとした」 ('foar|komme) (Zantema 1984: 299)
- オ. Ik probeerde dat te *voorkomen*. 「同上」 (voor'komen)
- フ. Wy *lizze* it mei-inoar *oer*. 「私たちはそのことを互いに相談します」 ('oer|lizze) (Sytstra/Hof 1925: 132)
- オ. We *overleggen* het met elkaar. 「同上」 (over'leggen)
- フ. Soks *komt* jin net alle dagen *oer*. 「そんなことは毎日, 身の上にかかるものではない」 ('oer|komme) (Hoekstra 1998: 151)
- オ. Zoiets *overkomt* je niet elke dag. 「同上」 (over'komen) (ib. 151)

西フリジア語では分離動詞の分離成分だが, オランダ語では非分離動詞の接頭辞である語が存在する。

- i) フ. 'oan|bidde 「崇拜する」
 オ. aan'bidden 「同上」
- ii) フ. 'oer|freegje 「不当に高い金額を請求する」
 オ. over'vragen 「同上」
- iii) フ. 'troch|sykje 「探しまわる, くまなく探す」
 オ. door'zoeken 「同上」
- iv) フ. 'troch|stean 「耐えぬく」
 オ. door'staan 「同上」
- フ. It famke *bidt* har idaal *oan*. 「その女の子は自分のアイドルを崇拜している」 ('oan|bidde) (Eisma 1989: 25 変更)
- オ. Het meisje *aanbidt* haar idool. 「同上」 (aan'bidden)
- フ. Ik *socht* alles *troch*. 「私はすべてを探しつくした」 ('troch|sykje) (ib. 25 変更)
- オ. Ik *doorzocht* alles. 「同上」 (door'zoeken)

☞ 上記の区別はオランダ語の影響でかならずしも厳密に守られておらず, 揺

れが認められることがある。たとえば、Dykstra (2000) には、上記の語のなかで、オランダ語と同様の相違を伴って記載されているものがある (Zantema (1984) では分離動詞の分離成分としてのみ記載されている)。

ˈoer|komme 「やって来る, 訪問する, あふれる, 腐る」

⇔oerˈkomme 「(人に) 起こる・降りかかる」(Dykstra 2000: 467)

ˈfoar|komme 「前に出る, 生じる, (...のように) 思われる」

⇔foarˈkomme 「予防する, 先手を打つ」(ib. 179)

ˈtroch|brekke 「二つに割る・割れる, (太陽が雲間から) 現われる」

⇔trochˈbrekke 「突破する, (慣習・法律などを) 破る」(ib. 736)

Hoekstra (1998: 151) は「(車が...を) ひく」を分離動詞ˈoer|rideとしているが, Zantema (1984: 685) と Dykstra (2000: 468) は非分離動詞oerˈrideと記載している。

フ. Ik *ried* juster in kat *oer*. 「私は昨日, 猫をひいてしまった」(ˈoer|ride) (Hoekstra 1998: 151)

オ. Ik *overreed* gisteren een kat. 「同上」(overˈrijden) (ib. 151)

Zantema (1984: 685) は「概観する, 展望する」を非分離動詞oerˈsjen (オ. doorˈzien) と記載しているが, Dykstra (2000: 468) と Hoekstra (1998: 151) は分離動詞ˈoer|sjenとしている。

次の語は Zantema (1984: 1079) と Dykstra (2000: 737) の間で相違がある。

trochˈkruse~ˈtroch|kruse 「挫折させる, 邪魔をする; 横断する, 歩き回る」(オ. doorˈkruisen) (Zantema 1984: 1079)

trochˈkruse 「挫折させる, 邪魔をする」

⇔ˈtroch|kruse 「横断する, 歩き回る」(Dykstra 2000: 737)

WFT (14/1997) には次の語が2通りに記載されている。

oanˈbidde~ˈoan|bidde 「崇拜する」(ib. 319)

参考文献

(前回までに掲載したものを除く)

Curme, George O. 1977¹¹ (1922). *A grammar of the German language*. New York. Frederick Ungar Publishing Co.

De Vries, Jan/F. de Tollenaere. 1971. *Nederlands etymologisch woordenboek*. Leiden/New York/Köln. Brill.

Dyk, Siebren. 1991. “Om as partikel fan struktuerleaze aktiviteiten”. *Tydskrift foar Fryske Taalkunde* 6. 69-98.

Dykstra, Anne. 2000. *Frysk-Ingelsk wurdboek/Frisian-English dictionary*. Ljouwert/

- Leeuwarden. Fryske Akademy/Afûk.
- Dijkstra, Waling. 1900-11. *Friesch woordenboek (Lexicon friscum)*. 1971 復刻版.
Amsterdam/Leeuwarden. S. Emmering/De Tille.
- Hoekstra, Jarich. 1991. “Oer it beklamjen fan ferhâldingswurden yn it Frysk, it
Hollânsk en it Ingelsk”. *Us Wurk* 40. 67-103.
- Hoekstra, Jarich. 1993a. “IG-tiidwurden en G-tiidwurden”. *Us Wurk* 42. 1-68.
- Hoekstra, Jarich. 1993b. “Omkearing en efterhelling: ta de partikels *werom* en *wer*”.
Us Wurk 42. 85-102.
- 亀井/河野/千野 (編) 1996. 『言語学大辞典第 6 巻述語編』. 三省堂.
- Kluge, Friedrich. 1995²³. *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. (bear-
beitet von Elmar Seebold). Berlin/New York. Walther de Gruyter.
- Pfeiffer, Wolfgang. (Hrsg.). 1993². *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. Mün-
chen. Deutscher Taschenbuch Verlag.
- 清水 誠 1984. 「Gottfried の „Tristan“ における中高ドイツ語動詞接頭辞 GE- の研究
一語彙・文法・文体」『ドイツ文学 第 72 号』. 日本独文学会. 96-110.
- Sipma, P. 1949. *Ta it Frysk II*. Ljouwert. R. van der Velde.
- Tamminga, D. A. 1963. *Op 'e taelhelling I*. Boalsert. Osinga.
- Tiersma, Pieter Meijes. 1999². *Frisian reference grammar*. Ljouwert. Fryske
Akademy.

*本稿は筆者の以下の論文に続く西フリジア語の文法構造の記述である。

- 「西フリジア語の音韻と正書法 (1)」(北海道大学文学部紀要 44-1. 第 85 号. 1995. 37-81)
- 「西フリジア語の音韻と正書法 (2)」(北海道大学文学部紀要 44-2. 第 86 号. 1995. 43-111)
- 「西フリジア語の文法構造－冠詞, 名詞, 形容詞－」(北海道大学文学部紀要 45-1. 第 88 号.
1996. 21-81)
- 「西フリジア語の文法構造－代名詞－」(北海道大学文学部紀要 45-2. 第 89 号. 1996.
79-176)
- 「西フリジア語の文法構造－数詞, 副詞, der－」(北海道大学文学部紀要 45-3. 第 90 号.
1997. 171-246)
- 「西フリジア語の文法構造－前置詞と後置詞 (1)－」(北海道大学文学部紀要 46-1. 第 91
号. 1997. 23-62)
- 「西フリジア語の文法構造－前置詞と後置詞 (2)－」(北海道大学文学部紀要 46-2. 第 92
号. 1998. 41-64)
- 「西フリジア語の文法構造－接続詞－」(北海道大学文学部紀要 46-3. 第 93 号. 1998.
65-121)
- 「西フリジア語の文法構造－動詞 (1)－」(北海道大学文学部紀要 47-2. 第 95 号. 1998.

21-97)

「西フリジア語の文法構造—動詞 (2)—」(北海道大学文学部紀要 47-3, 第 96 号, 1998. 53-72)

「西フリジア語の文法構造—動詞 (3)—」(北海道大学文学部紀要 47-4, 第 97 号, 1999. 89-124)

「西フリジア語の文法構造—動詞 (4)—」(北海道大学文学部紀要 48-1, 第 98 号, 1999. 21-55)

「西フリジア語の文法構造—動詞 (5)—」(北海道大学文学部紀要 49-1, 第 101 号, 2000. 93-129)

記述上の問題点については筆者の次の論文を参照。

「西フリジア語文法記述の問題点」(北海道大学文学部紀要 44-3, 第 87 号, 1996. 41-107)

* 本稿は平成 14 年度文部科学省・学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。

研究課題: 「西フリジア語文法記述のための最終的研究—ゲルマン語類型論の構築に向けて」, 基盤研究(c)(2), 課題番号 14510599 (研究代表者 北海道大学大学院文学研究科教授 清水 誠)